

気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書2

平成24～26年度東日本大震災復興交付金
埋蔵文化財発掘調査事業に伴う公共事業関連遺跡発掘調査

2019

気仙沼市教育委員会

序 文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震が引き起こした巨大津波は、東日本の沿岸部を襲い、本市においても沿岸部を中心に壊滅的な被害をもたらしました。被災家屋約 26,000 棟、被災世帯約 9,500 世帯、1,300 人を超える尊い命が犠牲となりました。

未曾有の大震災からの一日も早い復旧・復興を目指し、個人での住宅再建をはじめ、高台への集団移転、各種産業施設やインフラ関係等で大規模な開発計画に伴い、埋蔵文化財とのかかわりが急増いたしました。

本市には、縄文時代の貝塚や集落跡、中世の城館跡など、平成 31 年 1 月現在 181 箇所の遺跡が知られていますが、これらの多くは沿岸部の丘陵地帯に立地しているため、津波の浸水域を避けた土地を求める場合、必然的に埋蔵文化財とのかかわりが発生する可能性が増大するという地理的な状況にあります。

気仙沼市教育委員会では、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との両立を図るため、職員の再任用や任期付職員の採用に加え、宮城県や他自治体へ職員の派遣要請を行い、埋蔵文化財の発掘調査に対応する専門職員を確保するほか、宮城県教育委員会をはじめ関係機関に調査支援を要請するなど調査体制を整備してまいりました。

本書は、平成 24 年度から 26 年度にかけて、本市が国の東日本大震災復興交付金事業として実施した、防災集団移転促進事業等の公共事業に関連する埋蔵文化財発掘調査成果を集成した報告書ですが、収録した考古学的成果は、これまであまり知られていなかった当地域の歴史を解明する貴重な資料となるものです。太古から幾多の大津波や自然災害を克服しながら、手強い海と深くかかわる一方、豊かな海の恩恵を受け、この地に根差した文化を育んできた人びとの営みの一端を記録し伝えることが地域の再発見につながるとともに、大震災後の本市の復旧・復興に向けたまちづくりの一助となれば幸甚に存じます。

結びに、円滑な埋蔵文化財発掘調査にご協力をいただいた事業者の皆様、宮城県教育委員会、本市の埋蔵文化財発掘調査のためご支援をいただきました全国からの自治法派遣職員の皆様並びに派遣元自治体の皆様など、ご支援をいただいた多くの関係者・関係機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成 31 年 3 月

気仙沼市教育委員会
教育長 斎藤 益男

例　　言

- 1 本書は、平成 24～26 年度に実施した、東日本大震災からの復興に伴う防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業・農山漁村地域復興基盤総合整備事業等の公共事業に係る復興交付金事業による埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 各遺跡の発掘調査は、気仙沼市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の支援を受けて実施した。
- 3 本書に係る整理・報告書作成作業は、現地調査終了以降、平成 30 年度までに実施した。
- 4 現地発掘作業における記録図面作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。
- 5 杉の下貝塚における土壤分析については、株式会社加速器分析研究所へ委託し、分析結果についての原稿を依頼した。
- 6 本書の執筆は熊谷満が担当した。編集は熊谷が行った。
- 7 平成 23 年度以降に発掘調査を実施した周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）には、アルファベット大文字の 3 文字で遺跡記号を付与した。本書掲載遺跡の遺跡記号は以下の通り。

塚館跡	TSU	南最知城跡	MSJ	堀合館跡	HOR	野ヶ下遺跡	NON
田屋館跡	TAY	海藏寺北遺跡	KZJ	緑館遺跡	MID	東八幡館跡	HHD
猿喰東館跡	SAR	星谷遺跡	HOS	杉の下貝塚	SSK	波路上西館跡	HKN
杉の下南遺跡	SMK	波路上西遺跡	HJK				

- 8 遺物への注記は、各遺跡の記号を頭に、出土地点・出土層位・出土年月日を記入した。
- 9 調査に関する諸記録類及び出土遺物は、全て気仙沼市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 本書における遺構略号は以下の通り。
SI：堅穴建物跡 SA：柱穴列 SK：土坑 SD：溝跡 P：柱穴・ビット
SX：焼土遺構・性格不明遺構・遺物包含層
- 2 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 3 各遺跡の調査地点位置図は、国土地理院の提供する基盤地図を用いて作成した。
- 4 平成 14 年 4 月 1 日の測量法の改正に従い、本書の挿図には世界測地系（平面直角座標系第 X 系）に基づくグリッドを表示しており、方位標は真北を指す。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原 1996）に倣っている。
- 6 遺物図において、石器のスクリーントーンは磨面の範囲を示している。
- 7 出土遺物観察表の（ ）は復元推定値、〔 〕は残存値を示す。

目 次

序 文	第 5 章 野々下遺跡 ······	14
例言・凡例	第 6 章 田屋館跡 ······	23
目 次	第 7 章 海藏寺北遺跡・緑館遺跡 ······	26
第 1 章 調査の経過 ······	第 8 章 東八幡館跡 ······	30
1. 東日本大震災後の対応・予算措置等 ··· 1	第 9 章 猿喰東館跡 ······	34
2. 確認調査 ······	第 10 章 星谷遺跡 ······	46
3. 本発掘調査 ······	第 11 章 杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の	
4. 整理作業・報告書作成 ······	下南遺跡・波路上西遺跡 ······	51
第 2 章 塚館跡 ······	杉の下貝塚における放射性炭素年代 ······	82
第 3 章 南最知城跡 ······	本書の引用・参考文献一覧 ······	84
第 4 章 堀合館跡 ······	報告書抄録	

挿 図 目 次

図 1 本書掲載遺跡位置図	図 25 猿喰東館跡 調査地点位置図	34
図 2 塚館跡 調査地点位置図 ······	図 26 猿喰東館跡 調査区配置図	35
図 3 塚館跡 調査区配置図 ······	図 27 猿喰東館跡 遺構全体図	36
図 4 南最知城跡 調査地点位置図 ······	図 28 猿喰東館跡 SD2 平面・断面図	37
図 5 南最知城跡 調査区配置図 ······	図 29 猿喰東館跡 SX1 平面・断面図	38
図 6 堀合館跡 調査地点位置図 ······	図 30 猿喰東館跡 SK1 平面・断面図	39
図 7 堀合館跡 調査区配置図 ······	図 31 猿喰東館跡 SA1 平面・断面図	39
図 8 野々下遺跡 調査地点位置図 ······	図 32 猿喰東館跡 P1 ~ 19 平面・断面図	40
図 9 野々下遺跡 調査区配置図 ······	図 33 猿喰東館跡 P20 ~ 40 平面・断面図	41
図 10 野々下遺跡 T1 ~ 5,11,12 平面図	図 34 猿喰東館跡 P41 ~ 50 平面・断面図	42
図 11 野々下遺跡 SD1 平面・断面図 ······	図 35 猿喰東館跡 出土遺物	43
図 12 野々下遺跡 SD1 出土遺物	図 36 星谷遺跡 調査地点位置図	46
図 13 野々下遺跡 3T 包含層 出土遺物	図 37 星谷遺跡 調査区配置図	47
図 14 野々下遺跡 T7,9 平面図 ······	図 38 星谷遺跡 S1 平面・断面図	48
図 15 野々下遺跡 遺構外 出土遺物	図 39 星谷遺跡 S1 出土遺物	48
図 16 田屋館跡 調査地点位置図 ······	図 40 星谷遺跡 S12 平面・断面図	49
図 17 田屋館跡 調査区配置図 ······	図 41 星谷遺跡 S12 出土遺物	49
図 18 海藏寺北遺跡・緑館遺跡 調査地点位置図	図 42 杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・ 波路上西遺跡 調査地点位置図	52
図 19 海藏寺北遺跡・緑館遺跡 調査区配置図	図 43 杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・ 波路上西遺跡 調査区配置図	53
図 20 緑館遺跡 T8 出土遺物 ······	図 44 杉の下貝塚 ST1,4,5 出土遺物	54
図 21 東八幡館跡 調査地点位置図 ······	図 45 杉の下貝塚 ST5 遺構外 出土遺物	55
図 22 東八幡館跡 調査区配置図 ······	図 46 杉の下貝塚 ST6 平面図	56
図 23 東八幡館跡 第1次調査 調査区配置図		
図 24 東八幡館跡 第2次調査 調査区配置図		

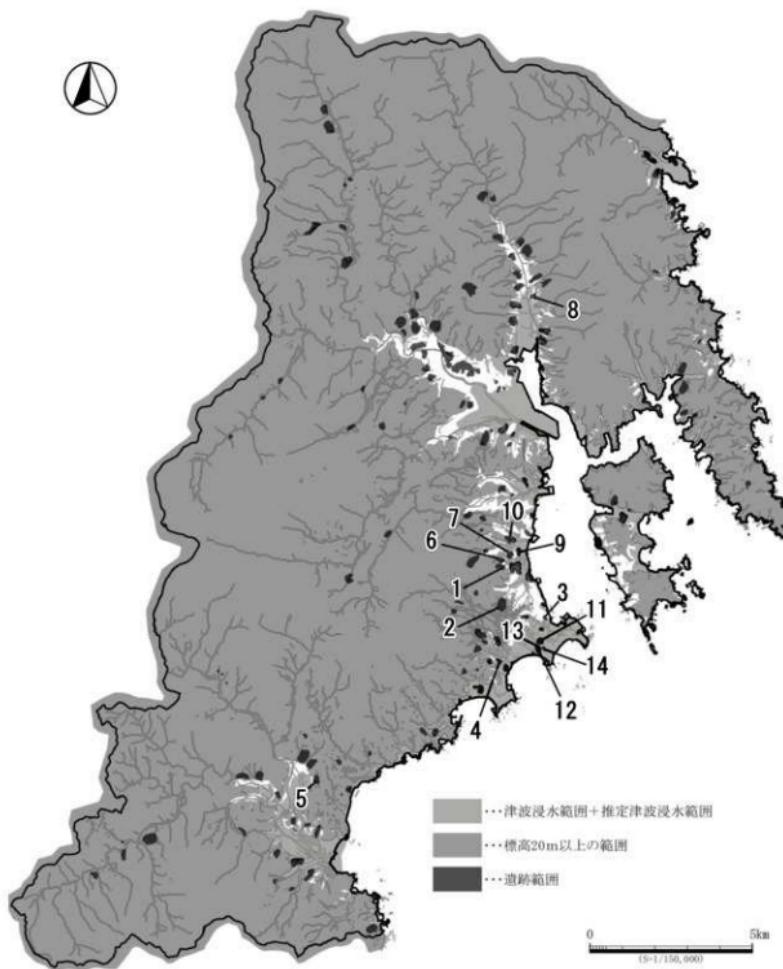
図 47	杉の下貝塚 ST6 出土遺物	56
図 48	杉の下貝塚 ST7 平面図	56
図 49	杉の下貝塚 ST7 遺構外出土遺物	57
図 50	杉の下貝塚 ST8 平面図	57
図 51	杉の下貝塚 ST8 遺構外出土遺物	57
図 52	杉の下貝塚 ST9 平面図	58
図 53	杉の下貝塚 ST9 遺構外出土遺物	58
図 54	杉の下貝塚 ST10 平面図	58
図 55	杉の下貝塚 ST10,12,13 遺構外出土遺物	58
図 56	杉の下貝塚 ST21 包含層出土遺物①	59
図 57	杉の下貝塚 ST21 包含層出土遺物②	60
図 58	杉の下貝塚 ST22 平面図	60
図 59	杉の下貝塚 ST22 SX6,7 出土遺物①	61
図 60	杉の下貝塚 ST22 SX7 出土遺物②	62
図 61	杉の下貝塚 ST22 SX7 出土遺物③	63
図 62	波路上西館跡・波路上西遺跡	
	HT3,10,11,13 平面図	65
図 63	波路上西館跡・波路上西遺跡	
	HT9,10,13,20,21 出土遺物	65
図 64	波路上西館跡・波路上西遺跡 HT23,25,26 平面図	66
図 65	波路上西館跡・波路上西遺跡 HT25,29,30 出土遺物	66
図 66	波路上西館跡・波路上西遺跡 HT40 遺構外 出土遺物	67
図 67	杉の下南遺跡 MT2,11 平面図	67
図 68	杉の下南遺跡 T2 S11,T11 S12 床面出土遺物	68

表 目 次

表 1	平成24～26年度 公共復興事業発掘調査一覧	3
表 2	塚跡調査区一覧	6
表 3	南最知城跡調査区一覧	9
表 4	堀合館跡調査区一覧	12
表 5	野々下遺跡調査区一覧	15
表 6	野々下遺跡出土土器観察表	20
表 7	野々下遺跡出土石器観察表	20
表 8	田屋館跡調査区一覧	25
表 9	海蔵寺北遺跡・緑館遺跡調査区一覧	28
表 10	緑館遺跡出土石器観察表	29
表 11	東八幡館跡調査区一覧	32
表 12	猿喰東館跡調査区一覧	35
表 13	猿喰東館跡遺構計測表	43
表 14	猿喰東館跡出土遺物観察表	43
表 15	星谷遺跡調査区一覧	47
表 16	星谷遺跡出土土器観察表	50
表 17	杉の下貝塚調査区一覧	54
表 18	波路上西館跡・波路上西遺跡調査区一覧	64
表 19	杉の下南遺跡調査区一覧	67
表 20	杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・ 波路上西遺跡出土土器観察表①	69
表 21	杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・ 波路上西遺跡出土土器観察表②	70
表 22	杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・ 波路上西遺跡出土土器観察表③	71
表 23	杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・ 波路上西遺跡出土土器観察表④	72
表 24	杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・ 波路上西遺跡出土石器観察表	72

写真図版目次

塚跡跡	7	東八幡館跡	33
南最知城跡	10	猿喰東館跡	44
堀合館跡	13	星谷遺跡	50
野々下遺跡	20	杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・ 波路上西遺跡	73
田屋館跡	25		
海蔵寺北遺跡・緑館遺跡	29		



地図番号	遺跡番号	所在地	遺跡名
1	59042	最知南最知	塚館跡
2	59043	長磯原ノ沢	南最知城跡
3	59038	波路上内田	堀合館跡
4	62042	本吉町野々下	野々下遺跡
5	62024	本吉町津谷松岡	田屋館跡
6	59023	最知南最知	海藏寺北遺跡
7	59024	最知南最知	緑館遺跡

地図番号	遺跡番号	所在地	遺跡名
8	59081	東中才	東八幡館跡
9	59045	最知北最知	猿喰東館跡
10	59104	岩月星谷	星谷遺跡
11	59030	波路上杉ノ下	杉の下貝塚
12	59036	波路上杉ノ下	波路上西館跡
13	59097	波路上杉ノ下	波路上西遺跡
14	59096	波路上杉ノ下	杉の下南遺跡

図1 本書掲載遺跡位置図

第1章 調査の経過

1. 東日本大震災後の対応・予算措置等

(1) 東日本大震災後の対応

①埋蔵文化財の取扱いについて

平成23年3月11日の東日本大震災の発生を受け、文化庁は、発災後の平成23年4月28日付け(23 庁財第61号)で「東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて(通知)」により、宮城県を含む1都7県1市の教育委員会教育長に対し、被災地の復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との整合性を図るよう通知を行った。また、平成24年4月17日付け(24 庁財第62号)で同名の通知を発し、宮城・岩手・福島・仙台市の3県1市の教育委員会教育長に対し、迅速な埋蔵文化財の発掘調査を実施するための留意点を示した。

宮城県教育委員会は、県内市町村に対し、平成23年6月3日付け(文第268号)で「東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」を発出し、事業計画の早期把握による周知の埋蔵文化財包蔵地での開発事業の回避及び発掘調査に備えた埋蔵文化財包蔵地の早期の内容把握を求めるとともに、宮城県発掘調査基準の弾力的な運用、専門職員の確保や民間調査組織の導入を含めた調査体制の充実を図り、迅速な発掘調査に努め、設定した調査期間を厳守することなどの方針が示された。

気仙沼市教育委員会では、文化庁及び宮城県教育委員会の提示した方針に基づき宮城県教育委員会の協力を得ながら、迅速かつ適正な発掘調査を実施することとした。

※東日本大震災によって文化庁が発した埋蔵文化財関係の通知等

- ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて(通知)(平成23年4月28日付け23 庁財第61号)
 - ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて(通知)(平成24年4月17日付け24 庁財第62号)
 - ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する平成23年4月28日付け文化庁次長通知(23 庁財第61号)について(通知)(平成25年2月18日24 庁財第691号)
 - ・東日本大震災の復興に伴う防災集団移転促進事業における埋蔵文化財発掘調査の実施に関する取扱いについて(通知)(平成25年3月15日付け事務連絡)
 - ・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する取扱いについて(回答)(平成25年3月15日付け事務連絡)
- ※東日本大震災によって宮城県教育委員会が発した埋蔵文化財関係の通知
- ・東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて(通知)(平成23年6月3日文第268号)

②調査主体

東日本大震災復興交付金事業の基幹事業に位置付けられた防災集団移転事業や土地区画整理事業等の大規模な事業については、分布・試掘調査を宮城県教育委員会が行い、確認調査及び本発掘調査を気仙沼市教育委員会が行うこととした。また、被災した個人住宅及び中小零細企業の店舗・工場等の再建に伴う発掘調査は、気仙沼市教育委員会が主体となり実施することとした。

気仙沼市教育委員会が主体となって行う調査については、調査内容・規模等必要に応じて隨時宮城県教育委員会から専門職員の派遣を受けて実施することとした。

(2) 調査体制

気仙沼市では、震災復興計画が策定される中で、集団移転事業など多くの開発事業が、周知の埋蔵文化財包蔵地へ影響を及ぼす可能性が高くなることが予想され、震災以前の文化財保護体制では、発掘調査を行う専門職員の不足が見込まれた。

そこで、平成 24 年 4 月以降、県外から自治法派遣職員の支援を受けたほか市任期付職員の採用もを行い、さらに宮城県教育庁文化財保護課からの調査協力を受け、発掘調査体制の強化を図った。

平成 24 ~ 26 年度における本書掲載遺跡の調査体制及び宮城県教育庁文化財保護課の調査協力体制は以下のとおりである。なお、各遺跡ごとの担当者は表 1 に示した。

生涯学習課文化振興係

調査年度	生涯学習課長	課長補佐	主幹兼文化振興係長	主幹	主査
平成 24	千葉 光広	鈴木 實夫	昆野 賢一	輔野 寛治	—
平成 25	千葉 光広	鈴木 實夫	昆野 賢一	—	西園 勝彦 (鹿児島県派遣)
平成 26	菅原 京子	鈴木 實夫	昆野 賢一	輔野 寛治	森 幸一郎 (鹿児島県派遣)
				野崎 進 (山梨県笛吹市派遣)	
				石川 郁 (任期付職員)	

宮城県教育庁文化財保護課

調査年度	調査協力職員（職名・敬称略、括弧内は派遣元自治体名）			
平成 24	豊村 幸宏（宮城県）	遠藤 武（愛媛県）	小淵 忠司（岐阜県）	大庭 俊次（島根県）
平成 25	西村 力（宮城県）	濱中 一道（宮城県）	池田 征宏（兵庫県）	高橋 洋彰（宮城県）
平成 26	相原 淳一（宮城県）	大友 邦彦（宮城県）	佐藤 则之（宮城県）	細川 金也（佐賀県）
	博田 恵隆（宮城県）	加藤 勝仁（神奈川県）	谷 和隆（長野県）	

(3) 復興交付金事業にかかる予算措置

被災した個人住宅や中小零細企業の店舗・工場等の再建にかかる確認調査・本発掘調査は、東日本大震災復興交付金事業の埋蔵文化財発掘調査事業に位置付けられている。また、防災集団移転促進事業や土地区画整理事業等の復興交付金基幹事業については、確認調査を埋蔵文化財発掘調査事業で行い、本発掘調査については当該基幹事業の中で行うこととなっている。

埋蔵文化財発掘調査事業に該当する発掘調査費用については、国費の負担割合を 75% に引き上げた上で、市が負担する 25% は特別地方交付税措置により補てんされることになっており、財政負担の軽減が図られている。

2. 確認調査

気仙沼市では、平成 30 年 4 月時点で 181 箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、「遺跡」）が確認されているが、その多くが沖積地に隣接した丘陵や段丘上に所在する。第 1 図は気仙沼市の遺跡の分布と東日本大震災の津波浸水域を示したものである。ほとんどの遺跡が津波の浸水を逃れている

表1 平成24～26年度 公共復興事業実績調査一覧

年度	調査名	基準名	基準番号	所在地	調査対象	審査主体	評定基準	調査面積 (単位：ha)	調査面積 (単位：ha)	面積	調査面積 換算面積	調査面積 換算面積
24	電線地盤	TSU	59042	福知山市	福知山市内(防火規制地帯) 電線地盤	気仙沼市	電線地盤	4,300	204	2012.08.10	なし	なし
	消火栓地盤	MSJ	59043	兵庫県 / F	兵庫県内(防火規制地帯) 消火栓地盤	気仙沼市	電線地盤	2,500	205	2012.08.20	2012.08.23	1 ha
24・25	東日本震災復興事業 防災施設等の整備			（大分類）	（小分類）	（大分類）	電線地盤	11,000	2,944	2012.07.09	2012.07.26	電線地盤
25	電線地盤	HOR	59038	兵庫県 / F	兵庫県内(防火規制地帯) 電線地盤	気仙沼市	電線地盤	11,000	6,000	2012.10.22	2013.06.28	電線地盤
25・26	台のF整備 台のF復興	DAI	62009	奈良県 / F	奈良県内(防火規制地帯) 台のF復興	気仙沼市	電線地盤	3,200	504	2013.12.09	2013.12.18	電線地盤
	消火栓地盤	DNK	62002	奈良県 / F	奈良県内(防火規制地帯) 消火栓地盤	気仙沼市	電線地盤	2,610	441	2014.01.27	2014.02.05	1 ha
25・26	台のF整備 台のF復興	DAI	62007	奈良県 / F	奈良県内(防火規制地帯) 台のF復興	気仙沼市	電線地盤	21,800	3,500	2013.07.01	2014.01.17	電線地盤
	消火栓地盤	TAV	62024	奈良県 / F	奈良県内(防火規制地帯) 消火栓地盤	気仙沼市	電線地盤	21,800	6,845	2013.07.22	2014.07.24	電線地盤
西側水道網	K21	59023	福知山市	福知山市内(防火規制地帯) (管轄権限：福知山市)	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	123,000	363	2014.05.19	2014.05.22	電線地盤
消火栓地盤	MED	59024	福知山市	福知山市内(防火規制地帯) (管轄権限：福知山市)	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	29,000	63	2014.06.25	2014.06.25	電線地盤
消火栓地盤	HHD	59081	東中予	（管轄権限： （管轄権限：）	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	1,110	54	2014.11.18	2014.11.18	電線地盤
26	電線地盤	MET	62033	多古町	福知山市内(防火規制地帯) (大分類)	気仙沼市	電線地盤	50,700	2,184	2014.07.01	2014.08.06	月のF上地、石畠、御園、 月のF上地、石畠、御園、
消火栓地盤	SAR	59055	相生市	福知山市内(防火規制地帯) (管轄権限：相生市)	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	50,700	5,697	2014.09.01	2014.12.25	月のF上地、石畠、御園、 月のF上地、石畠、御園、
消火栓地盤	SAR	59056	相生市	福知山市内(防火規制地帯) (管轄権限：相生市)	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	1,300	109	2014.11.25	2015.01.16	月のF上地、石畠、御園、 月のF上地、石畠、御園、
消火栓地盤	SAR	59057	相生市	福知山市内(防火規制地帯) (管轄権限：相生市)	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	1,300	135	2015.01.19	2015.03.27	月のF上地、石畠、御園、 月のF上地、石畠、御園、
消火栓地盤	SAR	59058	相生市	福知山市内(防火規制地帯) (管轄権限：相生市)	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	1,860	278	2015.02.18	2015.03.27	月のF上地、石畠、御園、 月のF上地、石畠、御園、
消火栓地盤	SAR	59059	相生市	福知山市内(防火規制地帯) (管轄権限：相生市)	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	273,000	1,204	2014.12.15	2015.02.02	月のF上地、石畠、御園、 月のF上地、石畠、御園、
消火栓地盤	SAR	59060	相生市	福知山市内(防火規制地帯) (管轄権限：相生市)	気仙沼市	電線地盤	電線地盤	108	2097			月のF上地、石畠、御園、 月のF上地、石畠、御園、

ことがわかるが、逆の見方をするならば、被災者の移転候補地に多くの遺跡が分布しているということになる。

平成 24 年 3 月 23 日に復興交付金事業の交付決定を受け、公共事業に関しては平成 24 年 4 月から埋蔵文化財とのかかわりについて協議が開始された。その後事業との調整や発掘調査に係る契約等を経て同年 7 月から確認調査を実施した。

震災復興に係る遺跡の取り扱いは、現地保存を前提とし、やむを得ず本発掘調査を実施する場合も、掘削範囲を必要最小限に留めるよう調整している。

調査に際しては、復興事業にかかる調査の円滑化・迅速化を推進するため、宮城県発掘調査基準の彈力的な運用がなされた。

平成 24 ~ 26 年度に公共事業に伴って本事業で実施した確認調査は、12 件 18 遺跡である。ほか、本事業外であるが、公共事業に関連するものとして、災害公営住宅公募買取事業、大島架橋事業、海岸保全施設整備に伴って 3 件 3 遺跡の確認調査を実施している。

確認調査の結果、遺構・遺物が確認され本調査に至ったものは 4 件である。それ以外のものは、遺構・遺物が確認されなかった、あるいは事業主体者による検出遺構の保護処置が図られることとなり、調査期間の短縮による住宅の早期再建と遺跡の現地保存を両立することができた。

3. 本発掘調査

平成 24 ~ 26 年度に本事業で実施した本発掘調査は 3 件 4 遺跡で、「波怒棄館遺跡」、「台の下遺跡・台の下貝塚」、「櫛館跡」が該当する。いずれも防災集団移転促進事業および災害公営住宅整備事業に伴う調査で、それぞれ別途報告書刊行のため、本書では一覧表（表 1）の提示にとどめる。

また、表 1 に掲げた「猿喰東館跡」の本調査に関しては別事業の取扱いとなるため、こちらも別途報告書刊行の予定である。

4. 整理作業・報告書作成

本書に係る整理作業及び報告書作成作業は、平成 26 ~ 30 年度に気仙沼市文化財収納庫及び旧浦島小学校整理作業場で行った。

宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、星谷遺跡出土遺物の実測は堤英明（平成 27 年度佐賀県派遣）氏、杉の下貝塚・波路上西館跡・波路上西遺跡・杉の下南遺跡出土土器の実測は相原淳一氏が行った。

杉の下貝塚で出土した自然遺物の分析については株式会社加速器分析研究所へ業務委託した（平成 27 年 2 月～平成 27 年 3 月）。

第2章 塚館跡

遺跡名：塚館跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59042）

所在地：気仙沼市最知南最知

調査原因：最知川原地区防災集団移転促進事業

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：平成24年8月7日～同年8月10日

対象面積：4,300 m²

調査面積：204 m²

調査員：幡野寛治

小瀬忠司、遠藤武（宮城県支援）

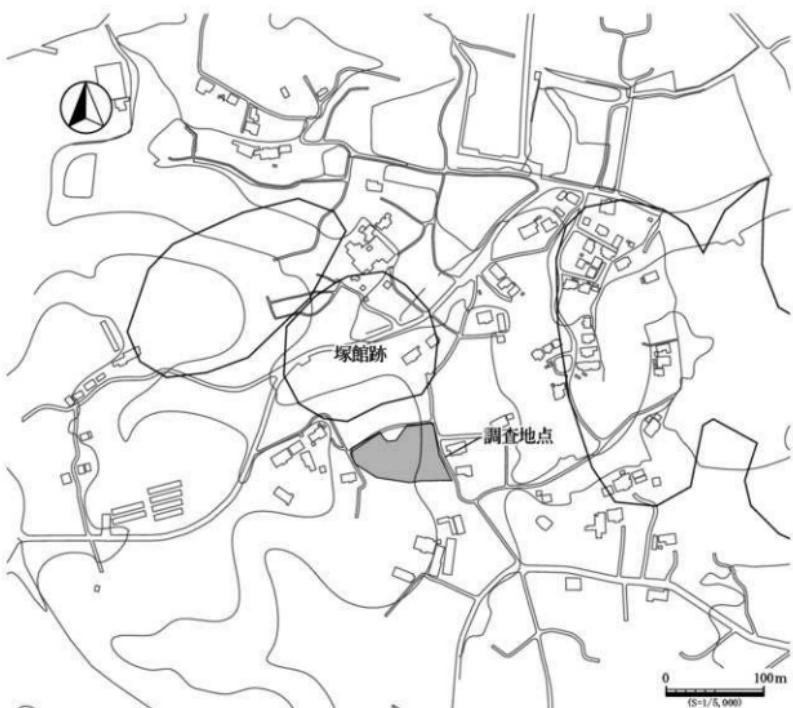


図2 塚館跡 調査地点位置図

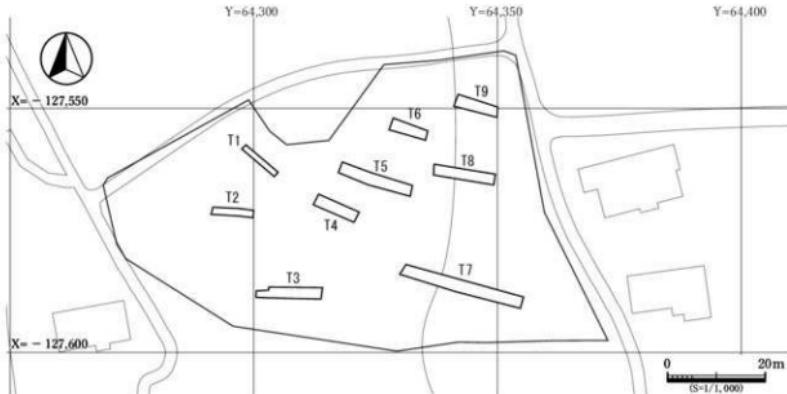


図3 塚館跡 調査区配置図

表2 塚館跡調査区一覧

調査区番号	規模 (m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
T1	1.3	8.8	記録なし	無	
T2	1.6	8.7	記録なし	無	
T3	2.3	13.4	記録なし	無	
T4	2.5	9.2	記録なし	無	
T5	2.5	15.2	0.3	無	
T6	2.5	7.9	0.2	無	
T7	2.5	25.8	0.2	無	
T8	2.3	12.8	0.2	無	
T9	2.5	9.3	0.2	無	

1. 調査に至る経緯

塚館跡は市域中央付近の気仙沼湾沿岸部に面する標高 15 ~ 38m 程の丘陵東斜面に立地し、北東から小谷が入り込んでいる。「塚館」の名称は、『仙台領内古城・館』によると、当地に土壇があり、郷人から「土塚」と呼ばれていたことに由来するという。周辺は海蔵寺跡、海蔵寺北遺跡、緑館跡、猿喰東館跡、最知中館跡、南最知貝塚、末永館跡など、周知の埋蔵文化財包蔵地が集中しており、これらはすべて東から入り込む谷地形を取り囲む丘陵上に点在する。

今回の調査は、塚館跡南隣接地での防災集団移転促進事業に係る住宅団地造成工事に伴い、確認調査を実施したものである。

2. 調査成果

調査対象地は、塚館跡跡の南に隣接する緩い東斜面であり、現況は畠地である。主として等高線の直交方向に調査区を計9箇所設定し、便宜的に T1 ~ 9 の調査区名を付して確認調査を実施した。

表土層直下が自然堆積の疊混じり褐色粘質シルトの基盤層であり、この上面で遺構確認を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。



調査地現況（南東から）



調査区遠景（南から）



T4 全景（東から）



T5 全景（西から）



T6 全景（西から）



T7 全景（西から）



T8 全景（西から）



T9 全景（西から）

第3章 南最知城跡

遺跡名：南最知城跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59043）

所在地：気仙沼市長磯原ノ沢

調査原因：杉の下地区防災集団移転促進事業

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：平成24年8月20日～同年8月23日

対象面積：2,500 m²

調査面積：205 m²

調査員：幡野寛治

豊村幸宏、小淵忠司（宮城県支援）

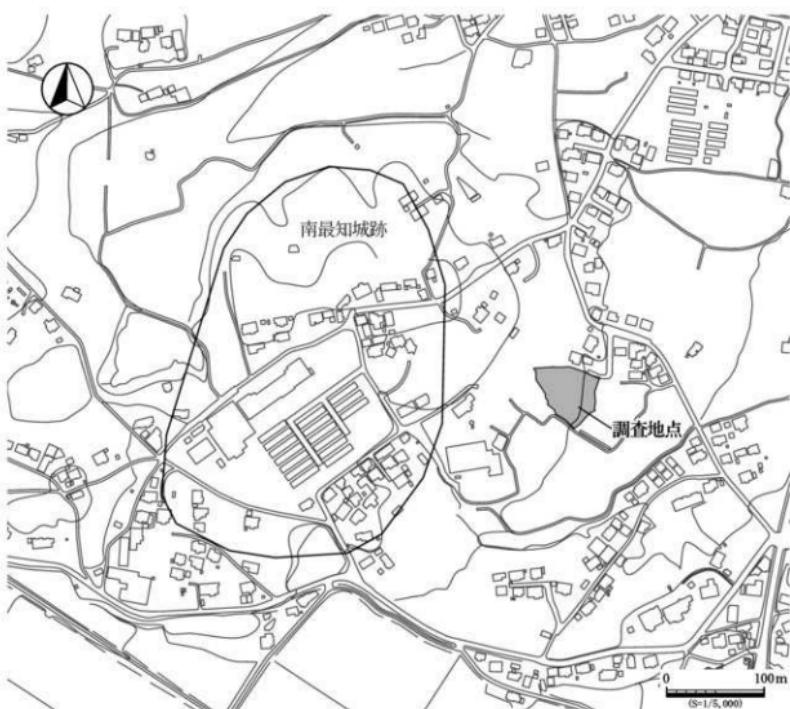


図4 南最知城跡 調査地点位置図

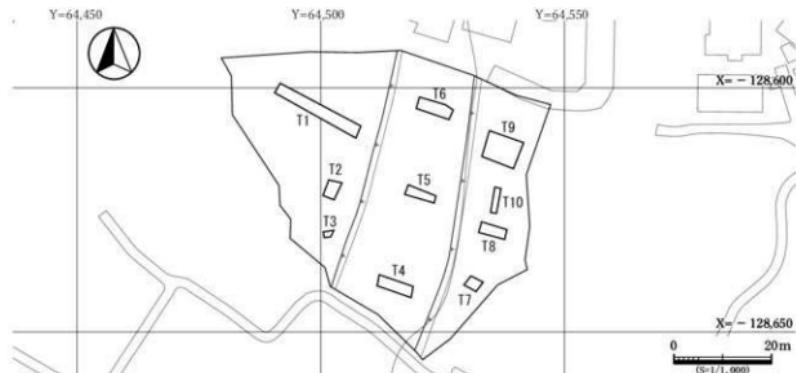


図5 南最知城跡 調査区配置図

表3 南最知城跡調査区一覧

調査区番号	規格 (m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
T1	2.5	19.1	0.55	無	
T2	2.6	3.9	0.4	無	
T3	1.3	2.3	0.35	無	
T4	2.4	7.4	1.0	無	
T5	1.9	6.3	0.5	無	
T6	2.7	7.2	0.6	無	
T7	2.4	2.9	1.1	無	
T8	2.2	5.6	0.9	無	
T9	5.7	7.3	0.25	無	
T10	1.3	5.3	0.9	無	

1. 調査に至る経緯

南最知城跡は、東方約1.3kmに気仙沼湾を臨む、標高28～38m程の丘陵頂部に所在する中世城館である。遺跡内には階上中学校が所在しており、「仙台領内古城・館」によると、校地となった場所が馬場跡、その西に延びる丘が二の丸跡と伝わるというが、現況では遺構は確認できない。葛西家臣阿部太郎左衛門が猿喰館よりここに移ったとされている。

今回の調査は、南最知城跡の東隣接区域での防災集団移転促進事業に係る宅地造成に伴い、確認調査を実施したものである。

2. 調査成果

調査対象地は、南最知城跡から東に下る緩斜面であり、現況は長年休耕地となっている田地である。主として等高線の直交方向に調査区を計10箇所設定し、便宜的にT1～10の調査区名を付して確認調査を実施した。

表土層直下が自然堆積の礫混じり褐色粘質シルトの基盤層であり、この上面で遺構確認を行ったが、遺構は発見されなかった。遺物は、T5表土層中より縄文土器と見られる小片が1点出土しているのみである。



調査地現況（東から）



T1 全景（東から）



T4 全景（西から）



T5 全景（東から）



T6 全景（東から）



T8 全景（東から）



T9 全景（西から）



T10 全景（南から）

第4章 堀合館跡

遺跡名：堀合館跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59038）

所在地：気仙沼市波路上内田

調査原因：波路上内田地区防災集団移転促進事業

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：平成 25 年 12 月 9 日～同年 12 月 18 日

対象面積：3,300 m²

調査面積：504 m²

調査員：西園勝彦

西村力、大庭俊次、池田征宏（宮城県支援）

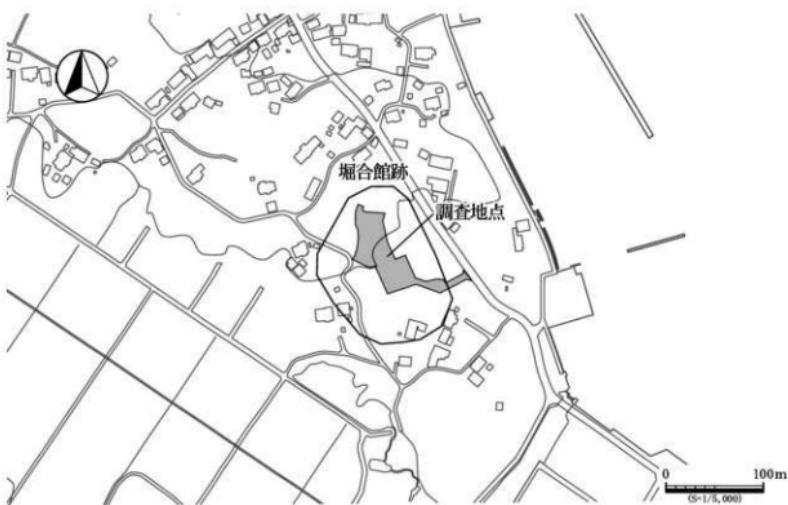


図6 堀合館跡 調査地点位置図

1. 調査に至る経緯

堀合館跡は市域波路上内田地内にあり、気仙沼湾の波路上漁港に面した標高 20m 程の丘陵先端に所在する中世城館である。『仙台領内古城・館』によると、市道を挟み東西 500 m、南北 300 mほどに広がる平地が館跡とされているが、明瞭な遺構は確認できない。葛西家臣の阿部太郎左衛門の居城と伝えられている。

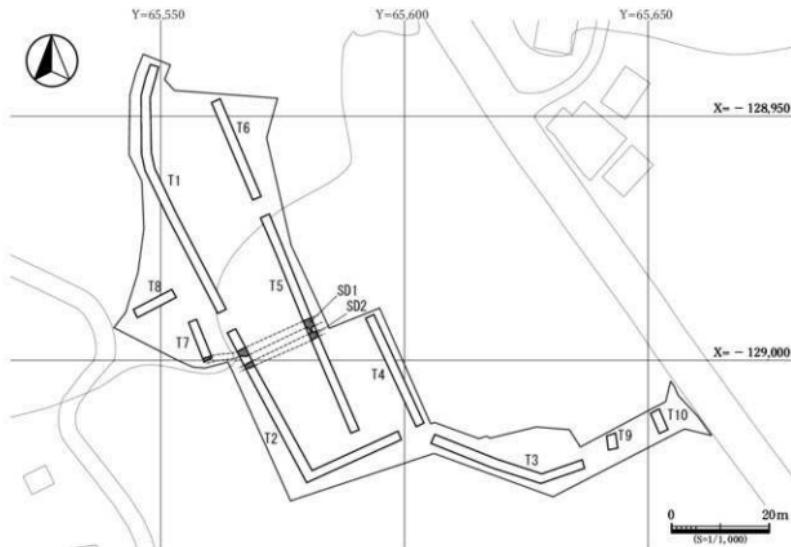


図7 堀合館跡 調査区配置図

表4 堀合館跡調査区一覧

調査区番号	規模(m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
T1	2.0	54.3	0.2 ~ 0.5	無	
T2	2.0	53.9	0.2 ~ 0.5	有 SD1,2 を検出。	
T3	2.0	32.9	0.3 ~ 0.5	無	
T4	1.9	24.6	0.3 ~ 0.4	無	
T5	1.9	47.9	0.3 ~ 0.4	有 SD1,2 を検出。	
T6	2.0	21.7	0.2	無	
T7	1.9	8.7	0.4	有 SD1 を検出。	
T8	1.9	9.0	0.3 ~ 0.5	無	
T9	2.0	3.0	0.3 ~ 1.0	無	
T10	2.0	4.6	0.9 ~ 1.5	無	

今回の調査は、堀合館跡南端部での防災集団移転促進事業に係る宅地造成工事に伴い、確認調査を実施したものである。

2. 調査成果

調査対象地は、堀合館跡の南側斜面であり、現況は畠地である。道路建設部分を中心に調査区を計10箇所設定し、便宜的にT1～10の調査区名を付して確認調査を実施した。

表土層直下が自然堆積の明黄褐色粘質シルトの基盤層であり、この上面で遺構確認を行った。調査の結果、T1からT5にかけて東西方向に延びるSD1,2の溝跡2条を検出し、いずれの覆土中からも近世以降のものと思われる陶磁器が出土している。



調査地現況（南から）



T1 作業風景（南から）



T2 SD1,2 検出状況（東から）



T2 全景（北から）



T5 SD1,2 検出状況（東から）



T5 SD1 堆積土層（東から）



T5 SD2 堆積土層（北東から）



T5 全景（北から）

第5章 野々下遺跡

遺跡名：野々下遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 62042）

所在地：気仙沼市本吉町野々下

調査原因：大谷地区防災集団移転促進事業（野々下台団地）

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：平成 26 年 1 月 27 日～同年 2 月 5 日

対象面積：2,640 m²

調査面積：441 m²

調査員：西園勝彦

濱中一道、大庭俊次、池田征宏（宮城県支援）

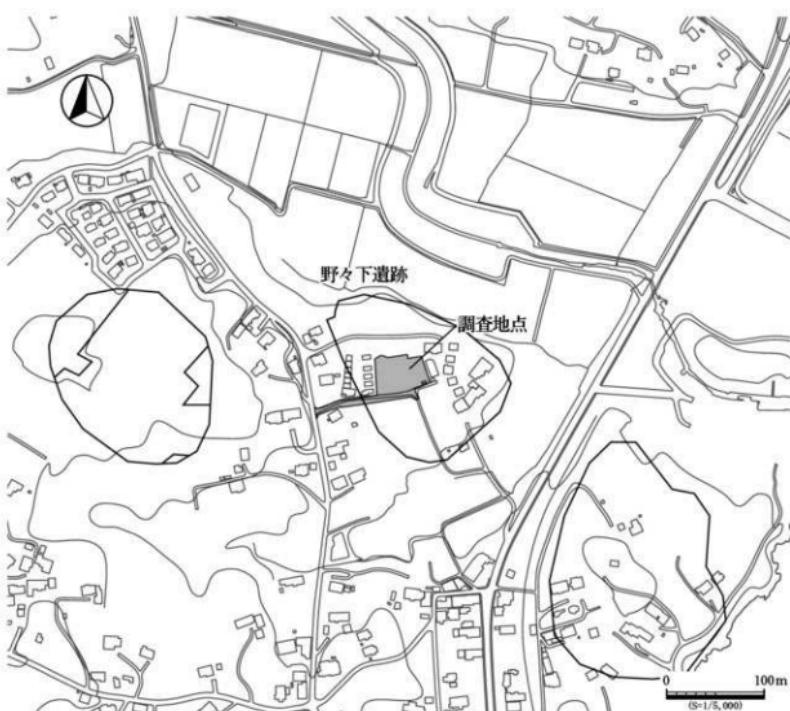


図8 野々下遺跡 調査地点位置図

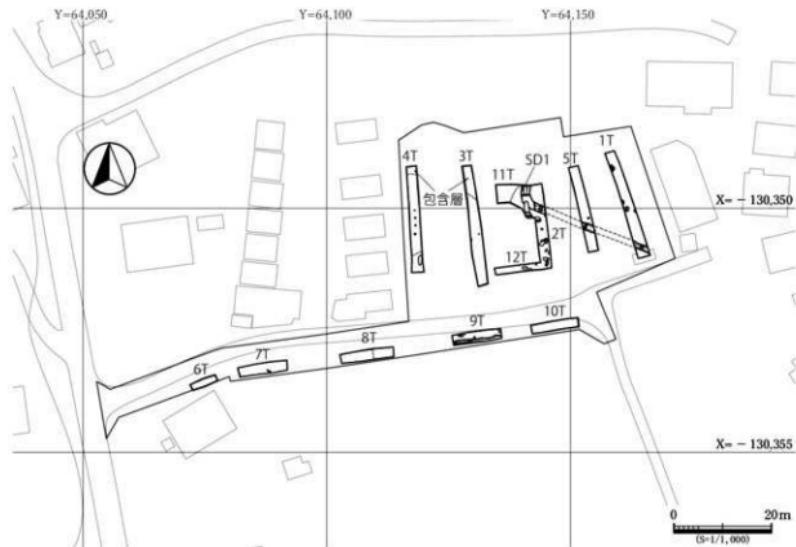


図9 野々下遺跡調査区配置図

表5 野々下遺跡調査区一覧

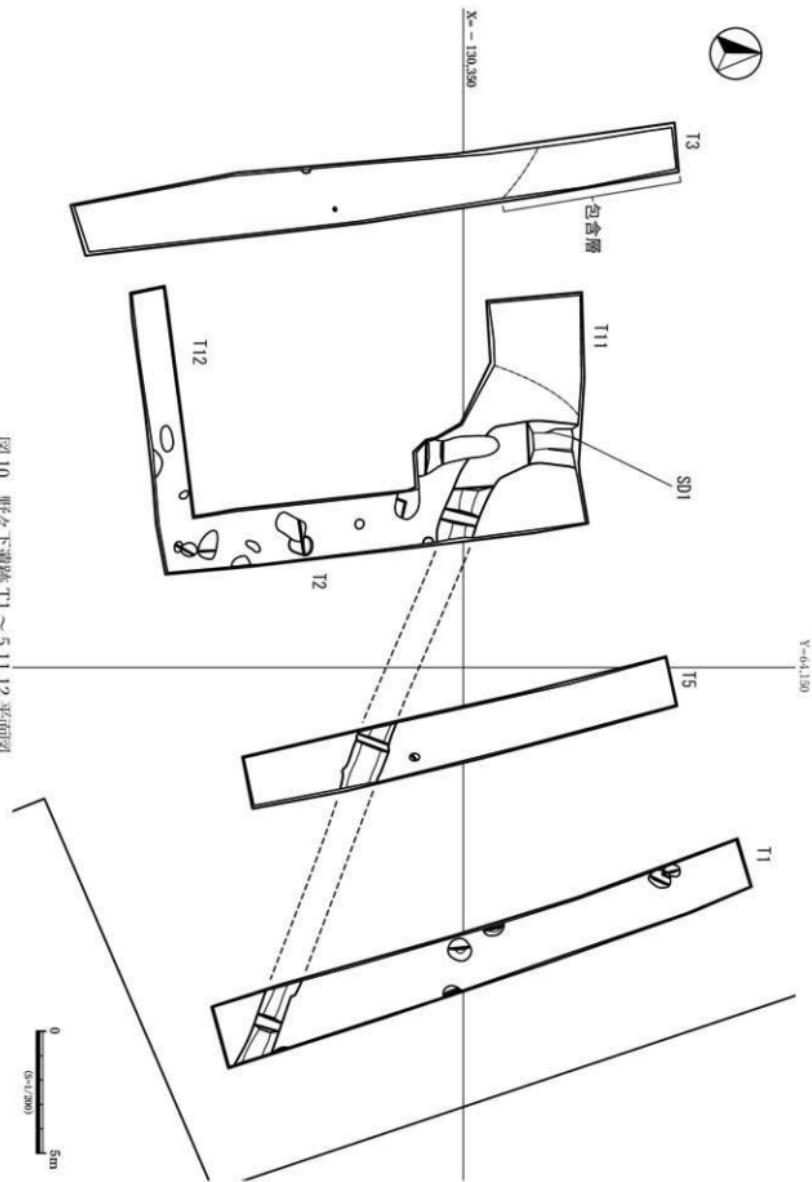
調査区番号	規模 (m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
T1	2.5	22.7	0.15	有	ピットを検出。
T2	2.4	17.5	0.15	有	SD1溝跡、ピット、土坑を検出。
T3	2.5	24.8	0.05 ~ 0.7	有	ピットを検出。
T4	2.3	21.8	0.15 ~ 0.4	有	ピット、土坑を検出。
T5	2.3	17.9	0.15	有	SD1溝跡、ピットを検出。
T6	1.8	5.6	0.2	無	
T7	2.3	10.1	0.2	有	ピットを検出。
T8	2.3	11.0	0.2 ~ 0.4	無	
T9	2.3	10.1	0.2	有	溝跡、ピットを検出。
T10	2.0	9.9	0.2	無	
T11	4.0	7.3	0.15	有	SD1溝跡、土坑を検出。
T12	1.5	9.5	0.15	有	ピットを検出。

1. 調査に至る経緯

野々下遺跡は市内本吉町野々下地内にあり、国道45号線西側の標高10～19mを測る丘陵東端部に所在する縄文時代の遺跡である。平成24年度に実施された発掘調査で、縄文時代の遺物とともにピット数基が発見されている。

今回の調査は、野々下遺跡の所在する丘陵頂部での防災集団移転促進事業に係る宅地造成工事に伴い、確認調査を実施したものである。

图 10 Ⅲ层下道沟 T1 ~ 5, 11, 12 平面图



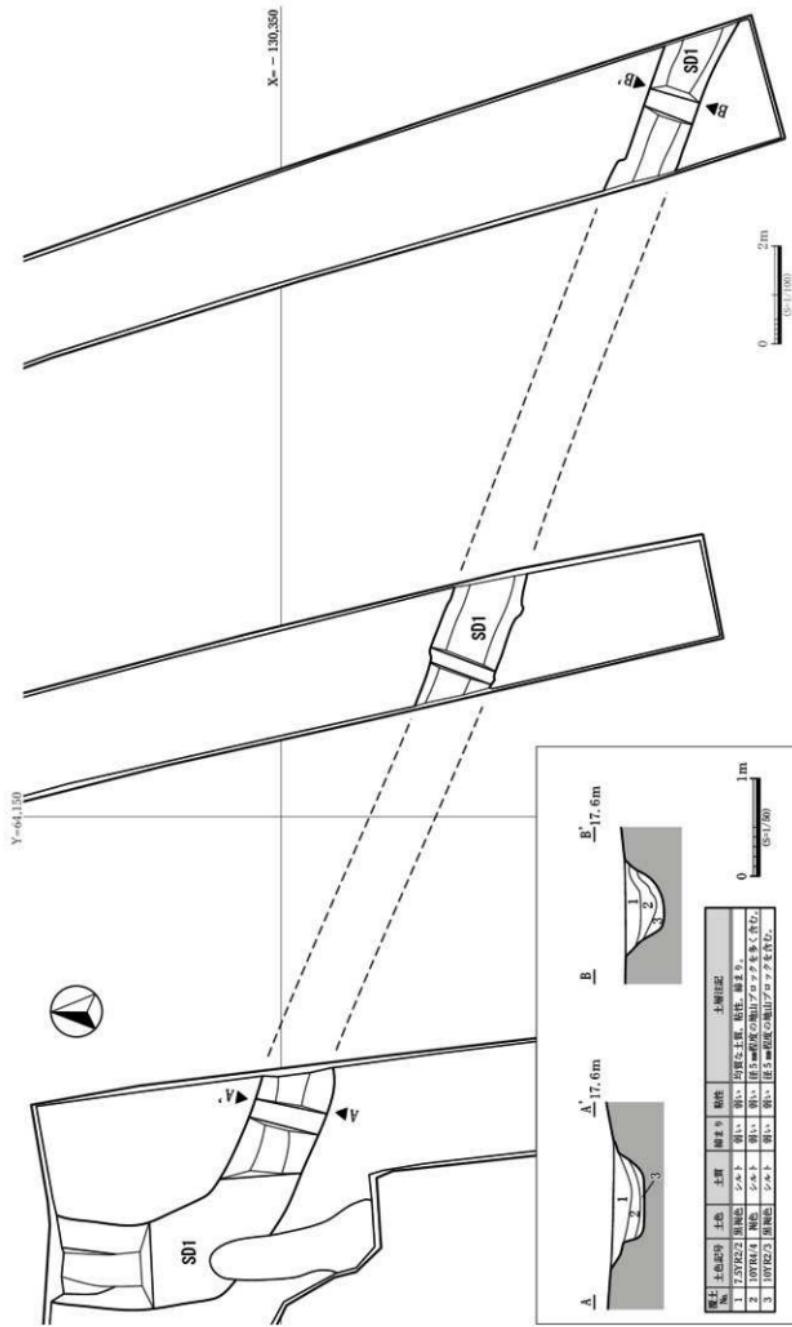


図11 野々下遺跡 SD1 平面・断面図

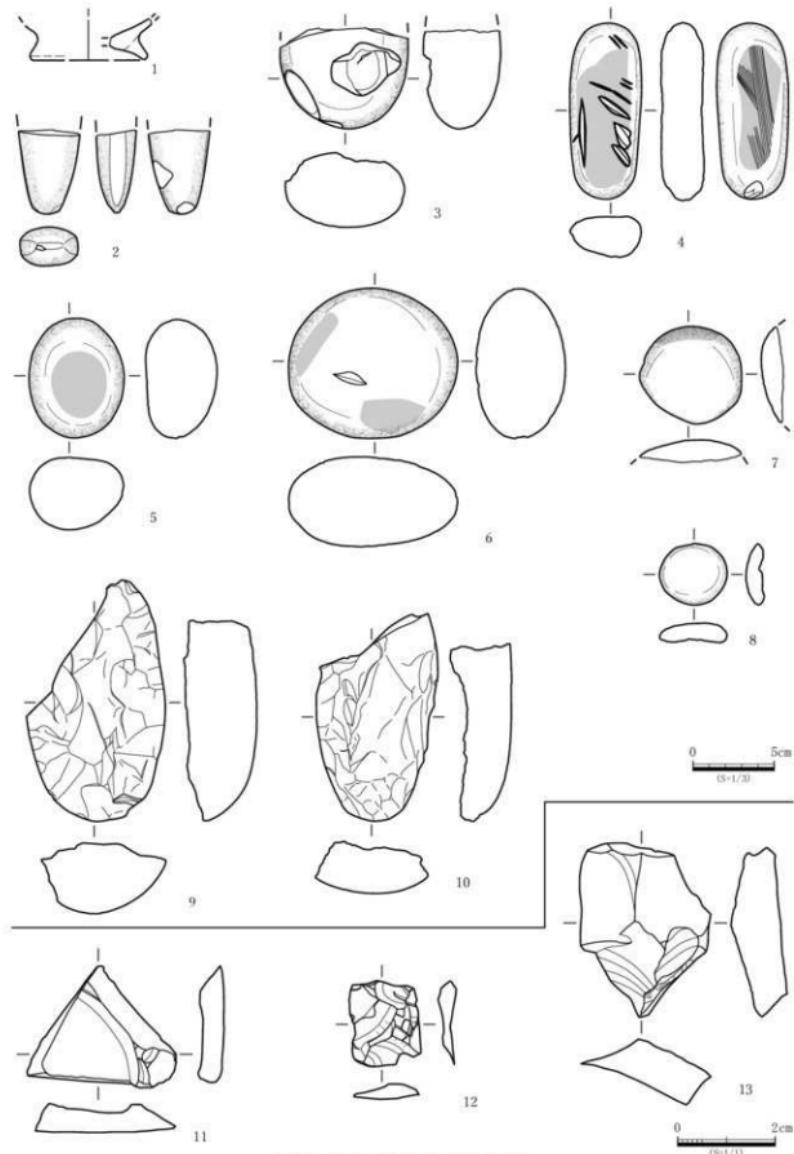


図 12 野々下遺跡 SD1 出土遺物

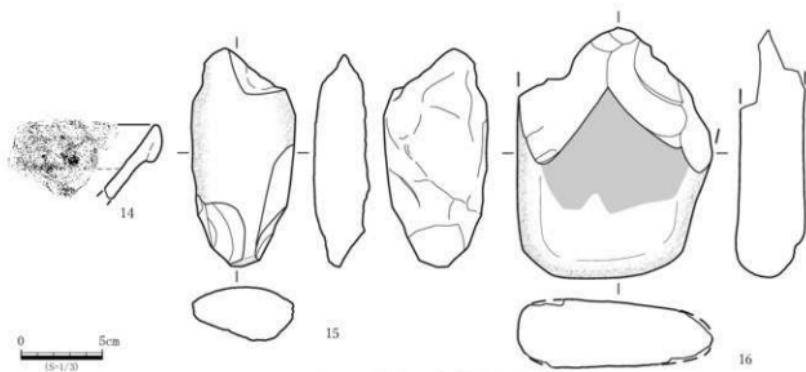


図13 野々下遺跡T3 包含層 出土遺物

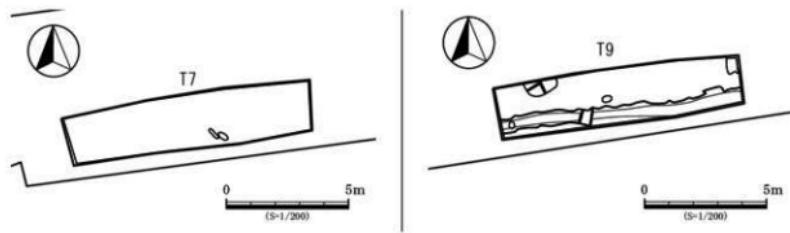


図14 野々下遺跡T7,9 平面図

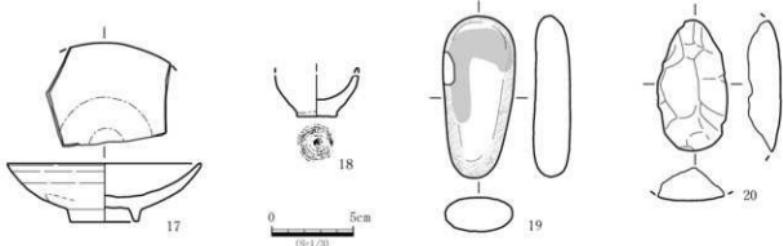


図15 野々下遺跡遺構外 出土遺物

2. 調査成果

調査対象地は、野々下遺跡の所在する丘陵頂部にあり、現況は畑地である。道路建設部分を中心に戸内区を計11箇所設定し、便宜的にT1～11の調査区名を付して確認調査を実施した。

表土層直下が自然堆積の明褐色粘質シルトの基盤層であり、この上面で遺構確認を行った。調査の結果、T1,2,5,11にかけて延びる溝跡SD1を検出したほか、T3,4では遺物包含層を検出した。

【SD1】

T1,2,5,11で検出した溝跡である。表土層直下が地山面となるため、生活面は後世の削平を受けていることが分かった。南東から北西へ延び、T11北端部付近でL字状に屈曲し、北へと向きを変えることが確認され、さらに調査区外北・南東へと延びていく。検出面の標高はT1で17.4m、T11で17.6m、底面標高はT5付近が最も高く約17.2mで、そこからT1,11両方向へ緩やかに下り、T1南東端部・T11北端部での底面標高は約17.0mを測る。規模は最大で幅約170cm、検出面からの深さ約60cmを測り、確認できた範囲での延長は約32mである。出土遺物は、縄文時代のものを主体とするが、古代の土師器高台付壺も1点出土している。

表6 野々下遺跡出土土器観察表

検岡No.	出土位置	種別	石材	遺存度	法量(cm)		特徴
					口径	底径	
12-1	SD1	土師器	高台付壺	—	(7.0)	(2.5)	船底決済色、内面黒色処理。貼付高台。
13-14	T3 包含層	容器系陶器	壺体	—	—	(4.5)	船底灰褐色、白色針状粒子微量合む。表面茶褐色。内面擬目残る。常滑市中世陶器。
15-17	T11 表土	青磁	瓶	(12.0)	4.2	3.6	船底明灰色、混入物なく精緻。淡緑色輪、内底面蛇の目釉調。削り出し高台。肥前窓か。
15-18	T11 表土	青磁	壺口	—	2.4	(2.5)	船底灰褐色、やや精緻。灰綠色輪。底部ロクロ未切り。

表7 野々下遺跡出土石器観察表

検岡No.	出土位置	種別	石材	遺存度	法量(cm)		備考
					長さ	幅	
12-2	SD1	磨製石斧	安山岩	刀部欠	(5.2)	3.8	2.5 部分的に剥離。
12-3	SD1	敲石	安山岩	半欠	(6.2)	7.9	4.8 数カ所打痕有り。
12-4	SD1	砥石	安山岩	完形	10.8	4.4	玉等の研磨用か。表面・裏面とも溝状の擦痕多い。
12-5	SD1	磨石	砂岩	完形	7.3	5.9	4.4 表面に平滑面有り。
12-6	SD1	磨石	安山岩	完形	10.4	9.3	5.5 壁部に削面有り。表面に敲打痕。
12-7	SD1	磨石	凝灰岩	大部分欠	(6.3)	(6.0)	(1.4) 壁部にわずかに削面有り。
12-8	SD1	円板状石製品	砂岩	完形	4.1	3.8	1.2 縦面レンズ状。
12-9	SD1	鍛船	安山岩	完形	14.8	8.6	4.4
12-10	SD1	鍛船	安山岩	完形	12.8	7.3	3.7
12-11	SD1	石核	凝灰岩	完形	2.9	2.3	0.5
12-12	SD1	微細剥離薄片	頁岩	完形	1.7	1.3	0.3
12-13	SD1	微細剥離薄片	凝灰岩	完形	3.4	2.5	1.0
13-15	T3 包含層	塊陶	黄鐵岩	完形	13.4	6.4	3.4 打製石斧未製品か。
13-16	T3 包含層	石皿	瓦岩	半欠	(15.4)	12.0	4.3 表面に削面有り。
15-19	T5 表土	磨石	安山岩	完形	9.9	4.4	2.3 全体的に摩滅。
15-20	T8 包含層	鍛船	凝灰岩	完形	8.0	4.3	2.0



調査地現況（西から）



調査地現況（南東から）



T1 全景（南から）



T2 全景（南から）



T5 SD 全景（南から）



T1 SD1（南東から）



T5 SD1（南東から）



T2,11 SD1（南から）



SD1 出土遺物 1



SD1 出土遺物 2



T3 包含層出土遺物



遺構外出土遺物

第6章 田屋館跡

遺跡名：田屋館跡（宮城県遺跡地名表登載番号 62024）

所在地：気仙沼市本吉町津谷松岡

調査原因：津谷地区災害公営住宅整備事業

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：平成26年4月21日～同年4月31日

対象面積：6,200 m²

調査面積：230 m²

調査員：尾野賢一、森幸一郎、野崎進

佐藤則之、大友邦彦、谷和隆（宮城県支援）

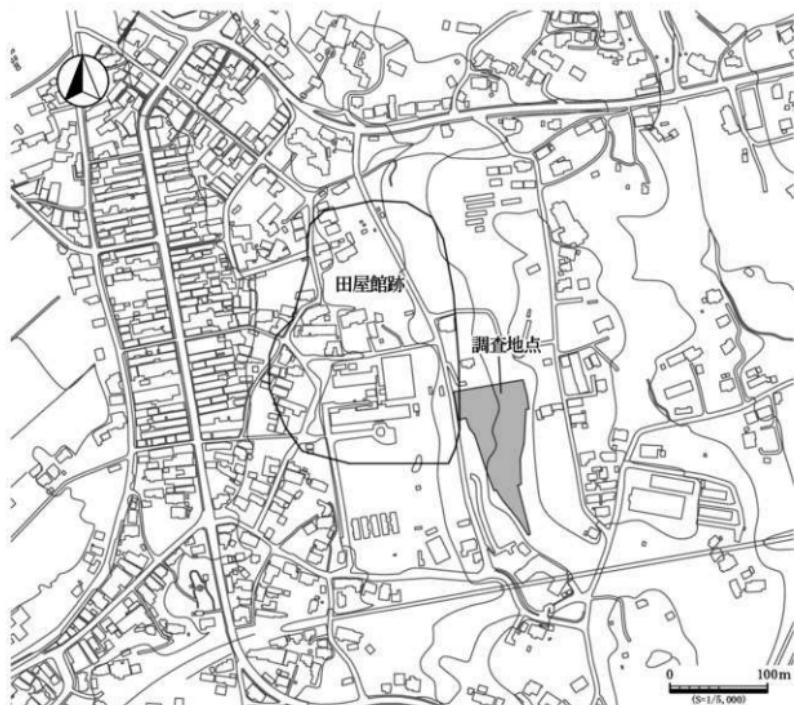


図16 田屋館跡 調査地点位置図

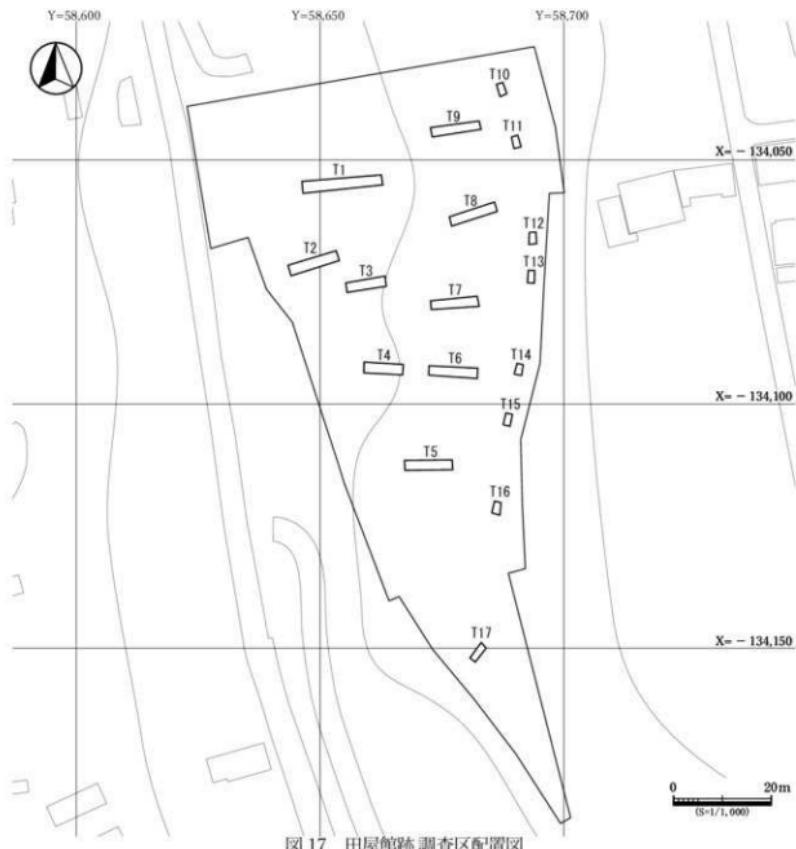


図 17 田屋館跡調査区配置図

1. 調査に至る経緯

田屋館跡は市内本吉町津谷松岡地内にあり、国道45号線と国道346号線に挟まれた標高65mの丘陵から西に下る、標高23~50mほどの丘陵西斜面に所在する。『仙台領古城書上』で、「田屋城方十六間 此城野武士楯籠」と記されるのがこの城跡と思われるが、館跡の所在は諸説あり定かではない。築城期や城主についても不明であり、在地の武装農民によって管理されていた時期があったことが知れるのみである。

今回の調査は、田屋館跡南東端部およびその隣接地での災害公営住宅整備事業に係る宅地造成工事に伴い、確認調査を実施したものである。

表8 田屋館跡調査区一覧

調査区番号	規模(m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
T1	2.4	16.5	記録なし	無	
T2	2.2	10.4	記録なし	無	
T3	2.1	8.2	記録なし	無	
T4	2.2	8.1	記録なし	無	
T5	2.1	9.9	記録なし	無	
T6	2.1	10.1	記録なし	無	
T7	2.0	10.0	記録なし	無	
T8	2.0	9.9	記録なし	無	
T9	1.9	10.2	記録なし	無	
T10	1.5	2.6	記録なし	無	
T11	1.5	2.5	記録なし	無	
T12	1.5	2.5	記録なし	無	
T13	1.5	2.6	記録なし	無	
T14	1.5	2.3	記録なし	無	
T15	1.5	2.5	記録なし	無	
T16	1.6	2.6	1.2	無	
T17	1.5	3.8	記録なし	無	

2. 調査成果

調査対象地は、田屋館跡およびその南東隣接地となる丘陵西斜面中腹にあり、現況は畠地である。

調査区を計 17箇所設定し、便宜的に T1 ~ 17 の調査区名を付して確認調査を実施した。

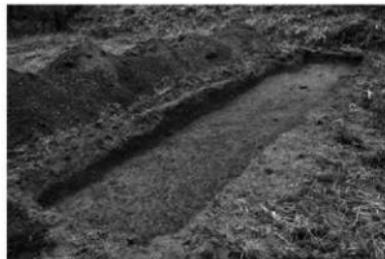
表土層直下が自然堆積の褐色粘質シルトの基盤層であり、この上面で遺構確認を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。



調査地現況（北東から）



調査区全景（北東から）



T1 全景（北東から）



T16 南壁堆積土層（北から）

第7章 海藏寺北遺跡・緑館遺跡

遺跡名：海藏寺北遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59023）

緑館遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59024）

所在地：気仙沼市最知南最知

調査原因：農山漁村地域復興基盤総合整備事業（最知工区）

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：平成 26 年 5 月 19 日～同年 5 月 22 日

対象面積：12,400 m²

調査面積：363 m²

調査員：幡野寛治、森幸一郎、野崎進

傅田恵隆、細川金也（宮城県支援）

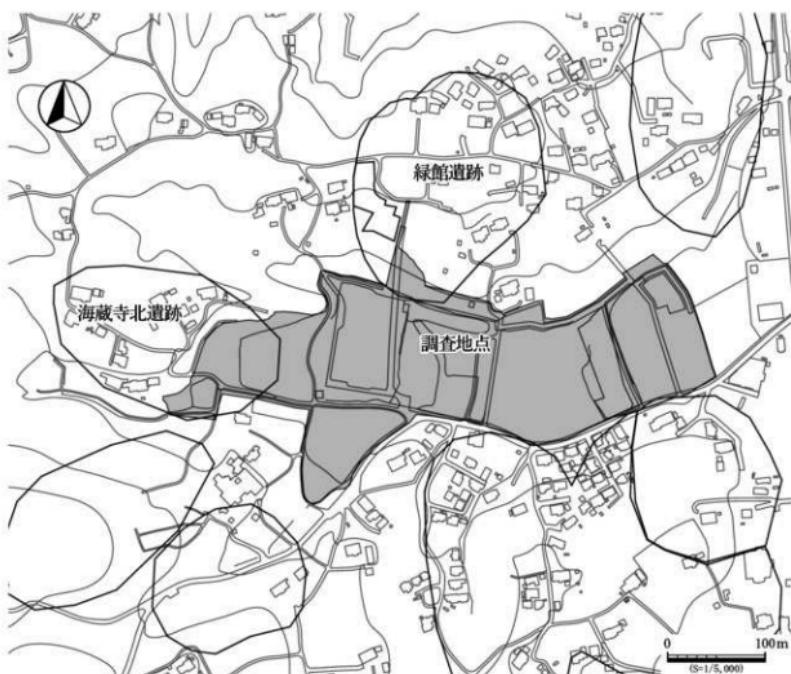


図 18 海藏寺北遺跡・緑館遺跡 調査地点位置図

海藏寺北遺跡・城跡調査区配図

図 19

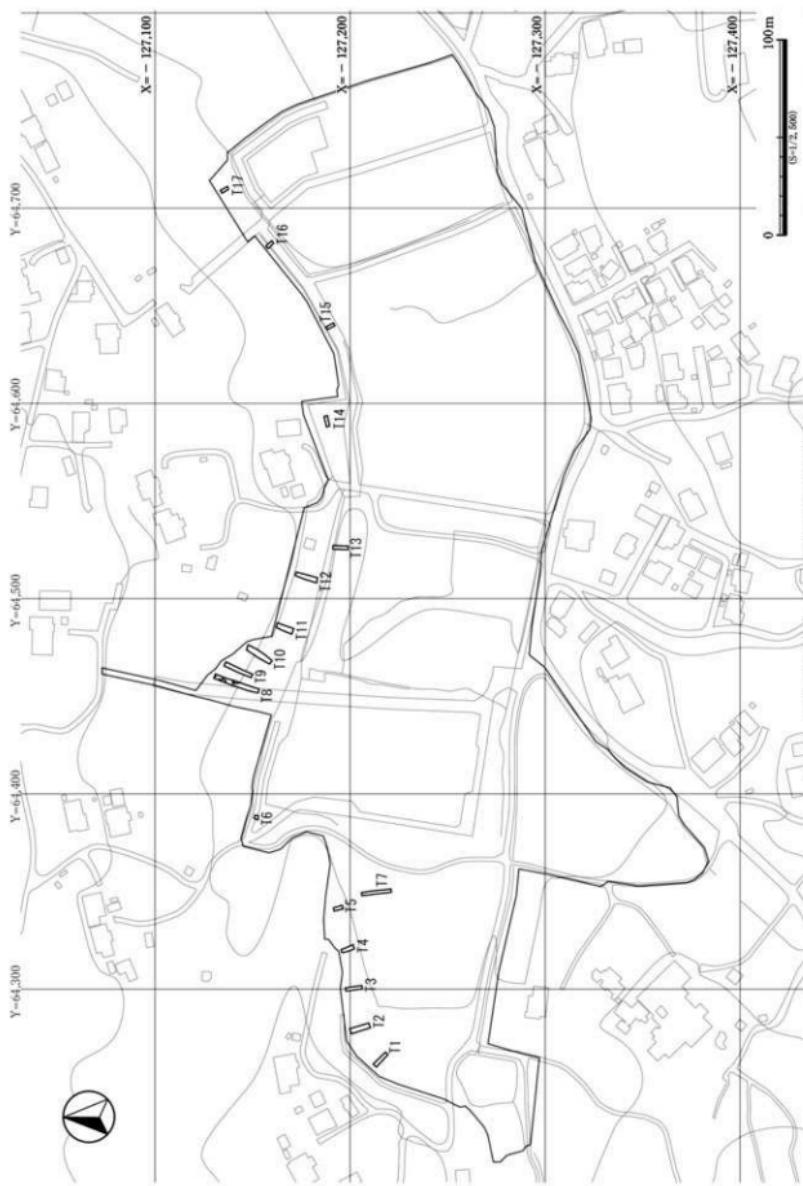


表9 海蔵寺北遺跡・緑館遺跡調査区一覧

調査区番号	規模(m)		検出面までの深さ(m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
T1	2.4	8.8	0.4 ~ 1.0	無	
T2	2.8	10.4	0.6 ~ 1.6	無	
T3	1.9	8.5	0.4 ~ 2.0	無	
T4	2.0	6.7	0.3	無	
T5	1.9	4.9	0.2 ~ 1.6	無	
T6	1.9	2.3	0.2 ~ 1.5	無	
T7	1.9	15.3	1.0 ~ 1.6	無	
T8	2.5	23.9	0.2	有	ピット、風倒木痕を検出。
T9	2.3	15.0	0.2	無	
T10	2.8	14.1	0.1 ~ 1.0	無	
T11	2.7	8.9	0.1 ~ 0.5	無	
T12	2.6	11.3	0.4	無	
T13	1.9	7.9	1.0	無	
T14	2.0	5.7	1.5	無	
T15	1.8	4.5	0.5 ~ 1.0	無	
T16	1.9	4.3	1.4	無	
T17	1.8	4.5	1.6	無	

1. 調査に至る経緯

海蔵寺北遺跡は市域中央付近の気仙沼湾沿岸部に面する標高 10 ~ 30m 程の丘陵東斜面に立地し、緑館遺跡は、海蔵寺北遺跡から北東約 130 m を測る標高約 24 m の丘陵頂部および南斜面に立地している。周辺は海蔵寺跡、塚館、猿喰東館跡、最知中館跡、南最知貝塚、末永館跡など、周知の埋蔵文化財包蔵地が集中しており、これらはすべて東から入り込む谷地形を取り囲む丘陵上に点在する。

農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴い、最知工区では海蔵寺北遺跡の東部および緑館遺跡の南部が事業計画範囲に含まれることから、確認調査を実施した。

2. 調査成果

包蔵地内および隣接区域に計 17箇所の調査区を設定し、便宜的に T1 ~ 17 の調査区名を付して確認調査を実施した。

海蔵寺北遺跡では、丘陵斜面部に設定した T1 ~ 5において、表土層直下より地山もしくは一部水田層を確認したが、遺構は発見されなかった。水田部に設定した T6,7 では、表土層直下で泥炭を含む灰色粘質土が厚く堆積し、遺構・遺物は発見されなかった。

緑館遺跡では、遺跡の南縁およびその近接地に T8 ~ 13 を設定し、T8 北端付近で年代不明の小穴 5 基、その南部で風倒木痕と思しき痕跡を確認した。T8 では表土層中より頁岩製の石鐵を 1 点出土している。T9 ~ 12 では、表土層直下で岩盤面が確認され、後世の削平を受けていることが判明した。遺構は発見されなかったが、T12 表土層中より土師器片が 1 点出土している。水田部に設定した T13 では、北端部が平坦面となっているものの、南側は斜面となり、泥炭を含む灰色粘質土で覆われていることを確認した。

T6,7,13 の調査成果から、事業範囲内の南部水田域については、泥炭を含む粘質土層が厚く堆積していることが推測される。また、海蔵寺北遺跡と緑館遺跡との中間となる丘陵裾部および水田部に T14 ~ 17 を設定し、調査を行ったが、埋没谷の堆積土と思われる泥炭を含む黒褐色粘質土が確認できたのみで、遺構・遺物は発見されなかった。



図20 緑館遺跡T8出土遺物

表10 緑館遺跡出土石器観察表

探査No	出土位置	種別	石材	遺存度	法量(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
20-1	T8	石器	白岩	完形	1.8	1.6	0.4	



調査地現況（西から）



T7 全景（南から）



T8 全景（南から）



T8 北半部全景（南から）



T16 全景（南から）



T8 出土遺物

第8章 東八幡館跡

遺跡名：東八幡館跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59081）

所在地：気仙沼市東中才

調査原因：防災集団移転促進事業（鹿折北地区）

調査主体：気仙沼市教育委員会

【第1次調査】

調査期間：平成 26 年 6 月 25 日

対象面積：29,000 m²

調査面積：63 m²

調査員：昆野賢一、鈴木寅夫、野崎進

【第2次調査】

調査期間：平成 26 年 11 月 18 日

対象面積：1,110 m²

調査面積：54 m²

調査員：昆野賢一、鈴木寅夫

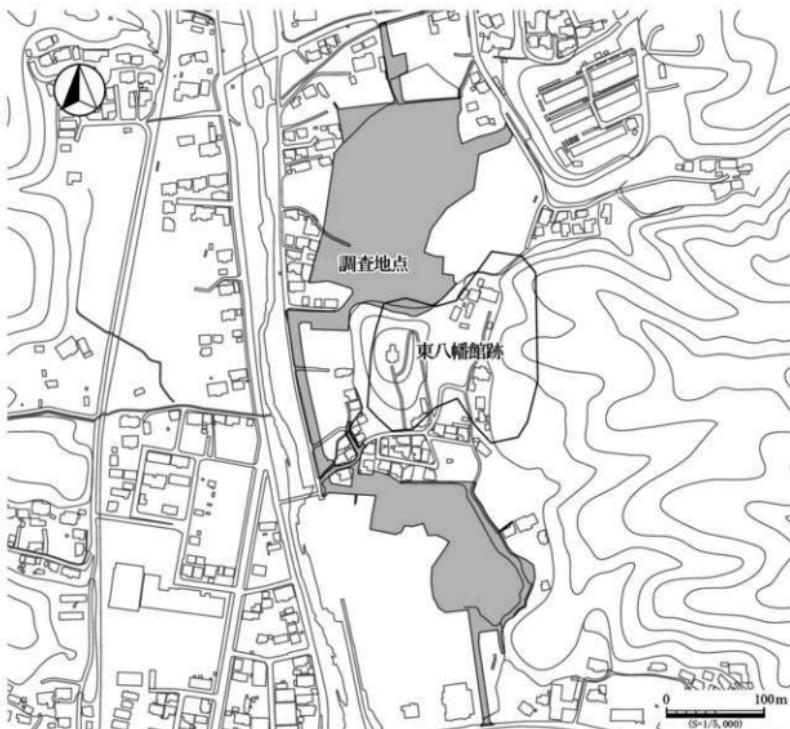


図21 東八幡館跡 調査地点位置図

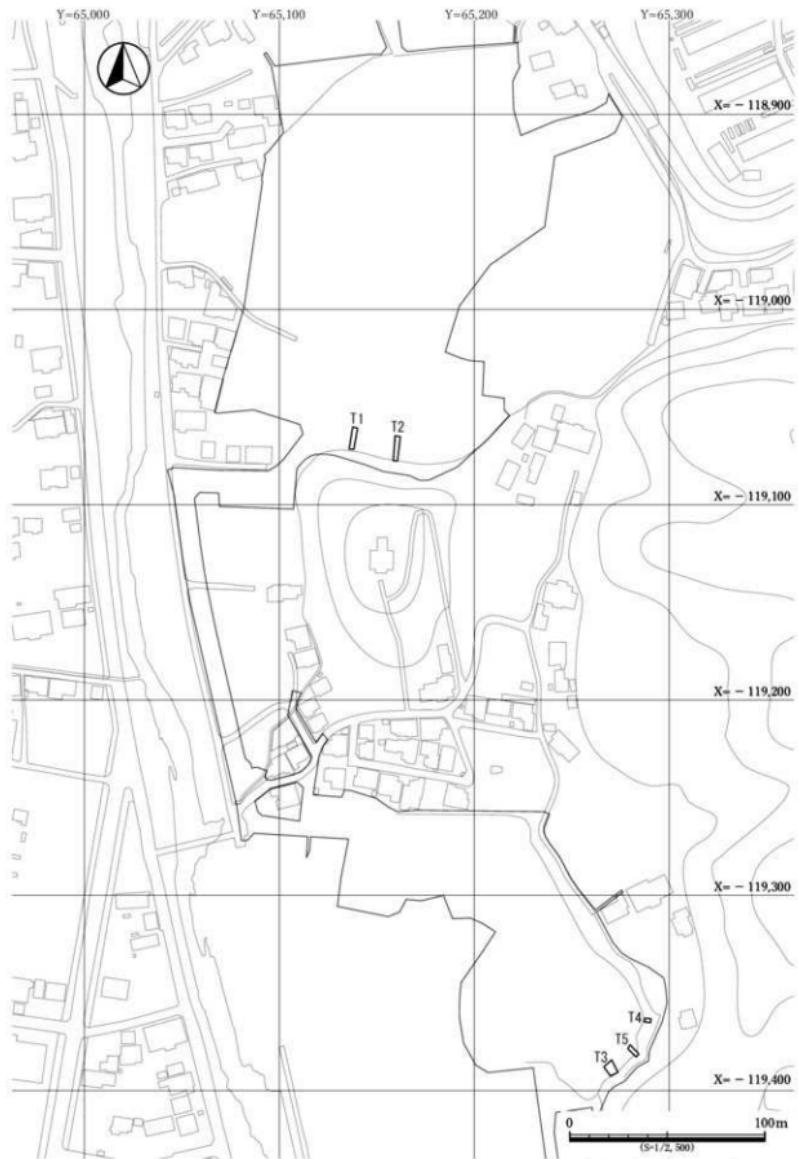


図22 東八幡館跡 調査区配置図

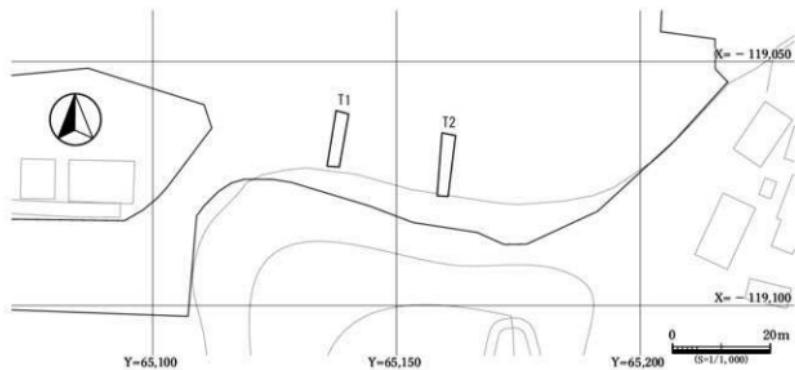


図 23 東八幡館跡 第1次調査 調査区配置図

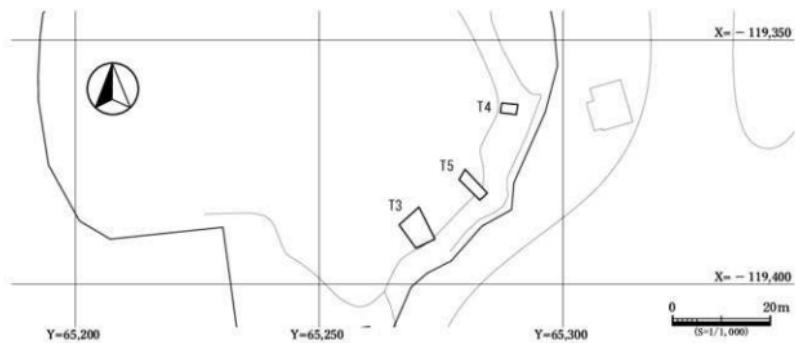


図 24 東八幡館跡 第2次調査 調査区配置図

表 11 東八幡館跡調査区一覧

調査区番号	規模(m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
T1	2.6	11.4	1.7	無	
T2	2.7	12.8	記載なし	無	
T3	5.0	6.7	[1.4]	無	地山未検出。
T4	2.1	3.4	[1.75]	無	地山未検出。
T5	2.3	6.4	[1.4]	無	地山未検出。

1. 調査に至る経緯

【第1次調査】

東八幡館跡は市域北部の東中才地内にあり、鹿折川河口から 1.7 km上流の東側、八幡神社の鎮座する標高約 26 m の独立丘陵に立地する城館跡である。東西・南北約 70 m四方の周囲は急傾斜地となっているが、現況では城館施設などの遺構は確認できない。

今回の調査は、東八幡館跡北端部での防災集団移転促進事業に係る住宅団地造成工事に伴い、確認調査を実施したものである。

【第2次調査】

第2次調査地点は、鹿折川河口から1.4km上流の東側、国道45号線から北方約100mの標高10～20mの丘陵西麓に所在する。東八幡館跡の南隣接地であり、現況畠の地表面に縄文土器の散布を確認したことから、調査対象となったものである。

今回の調査は、防災集団移転促進事業に係る住宅団地造成工事に伴い、確認調査を実施したものである。

2. 調査成果

【第1次調査】

調査対象地は、東八幡館跡およびその北隣接地となる沖積低地にあり、現況は田地である。現地表面の標高約2.5～2.8m。調査区を計2箇所設定し、便宜的にT1,2の調査区名を付して確認調査を実施した。

T1は、表土層下が水田層であり、その下層に氾濫堆積層と思われる乱れた堆積層が確認され、さらにその下層は泥炭層が堆積していた。T2では、泥炭層と砂層の互層が確認され、頻繁に水を被るような環境にあったことが分かった。いずれの調査区でも遺構・遺物は発見されなかった。

【第2次調査】

調査対象地は丘陵西麓部にあり、現況は荒蕪地である。現地表面の標高約0.5～1.8m。丘陵の傾斜に沿って調査区を計3箇所設定し、便宜的にT3～5の調査区名を付して確認調査を実施した。

調査の結果、いずれの調査区も表土層下にグライ化した粘土層が厚く堆積しており、湿地堆積の様相を呈していた。粘土層下位より縄文土器1点、土師器1点が出土しているが遺構は検出されず、出土した遺物については、丘陵部からの流れ込みによるものと捉えている。



T1 堆積土層（西から）



T2 堆積土層（北西から）

第9章 猿喰東館跡

遺跡名：猿喰東館跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59045）

所在地：気仙沼市最知北最知

調査原因：最知川原第二地区防災集団移転促進事業

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査期間：平成 26 年 11 月 25 日～平成 27 年 1 月 16 日

対象面積：1,300 m²

調査面積：109 m²

調査員：鈴木寅夫、野崎進



図 25 猿喰東館跡 調査地点位置図

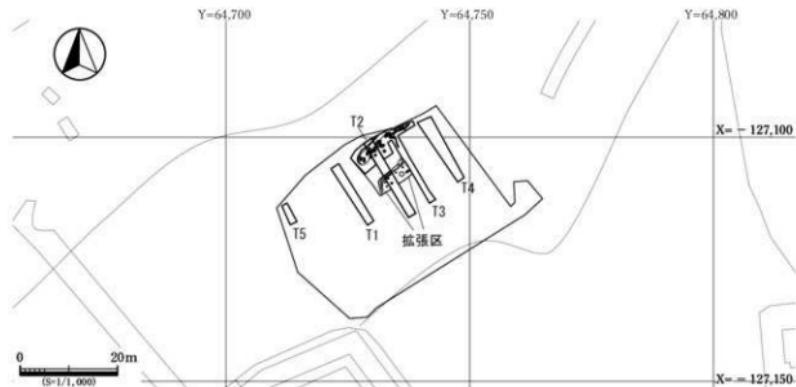


図26 猿喰東館跡調査区配置図

表12 猿喰東館跡調査区一覧

調査区番号	規模(m)	検出面までの深さ(m)	遺構の有無	備考
T1	1.9	13.8	0.25	無
T2	1.9	17.8	0.15	有 溝跡、ピットを検出。
T3	1.5	17.3	0.55	有 ピットを検出。
T4	2.6	14.5	1.50	有 ピットを検出。
T5	1.5	4.3	0.90	無
拡張区	5.7	8.1	0.15	有 溝跡、ピット、土坑を検出。

1. 調査に至る経緯

猿喰東館跡は市域中央付近の気仙沼湾沿岸部に面する標高2～15m程の丘陵東端部に立地し、東方約200mに気仙沼湾を臨む。『仙台領内古城・館』によると、天正16年(1978)の浜田兵乱の時に、攻防の拠点になった所だと伝えられ、数十年前にこの辺からたくさんの甲冑や刀が掘り出されたという。周辺は海蔵寺跡、海蔵寺北遺跡、綠館遺跡、塚館跡、最知中館跡、南最知貝塚、末永館跡など、周知の埋蔵文化財包蔵地が集中しており、これらはすべて東から入り込む谷地形を取り囲む丘陵上に点在する。

今回の調査は、猿喰東館跡南西隣接地での防災集団移転促進事業に係る住宅団地造成工事に伴い、確認調査を実施したものである。

2. 調査成果

調査対象地は、猿喰東館跡の南西に隣接する緩い南斜面であり、現況は畠地である。主として等高線の直交方向に調査区を計5箇所設定し、便宜的にT1～5の調査区名を付して確認調査を実施した。

表土層直下が自然堆積の褐色粘質シルトもしくは灰白色岩盤となる基盤層であり、この上面で遺構確認を行った結果、溝跡のほか土坑、ピットを発見した。遺物はピットから刀子が出土しているほか、包含層中より石器が2点出土している。



図27 滅陵東前庭遺構全体図

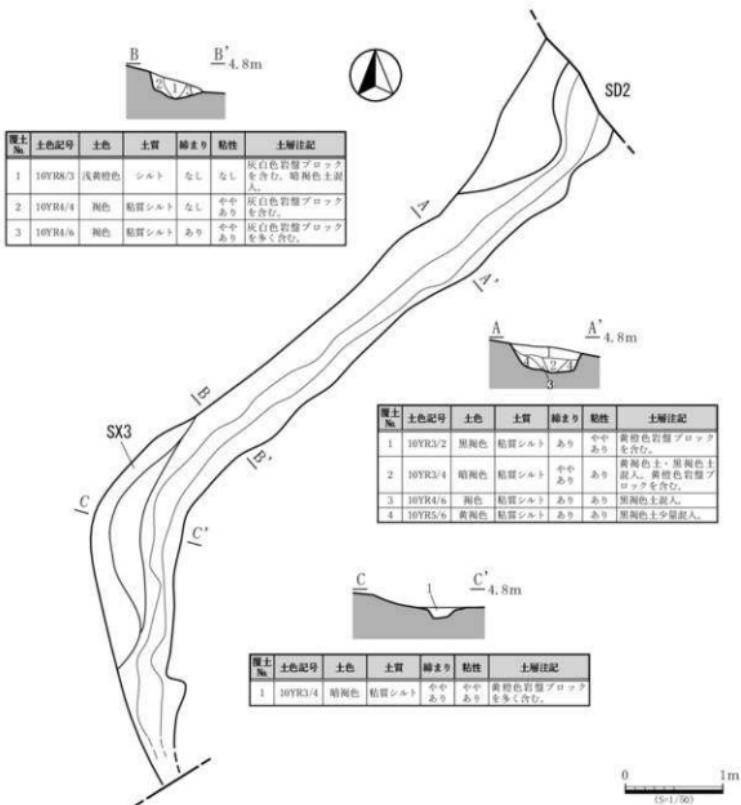


図28 猿喰東館跡 SD2 平面・断面図

【SD2】

調査地中央付近で検出した溝跡である。南から北へN-15°-Wの方向に延び、L字状に屈曲して北東へと向きを変え、南西から北東にN-51°-Eの方向へ延びることが確認された。さらに調査区外東・南へと延びていくが、南側は後世の削平により浅くなっている。東側は、T4で検出されていないことから、削平により失われたか、屈曲して調査区外を延びるものと考えられる。検出面の標高は約4.8mで、底面標高は東端部で約4.45m、南端部で約4.5mを測り、わずかに南側が高い。規模は最大で幅112cm、検出面からの深さ約29cmを測り、確認できた範囲での延長は約8.6mである。遺物は出土しなかった。

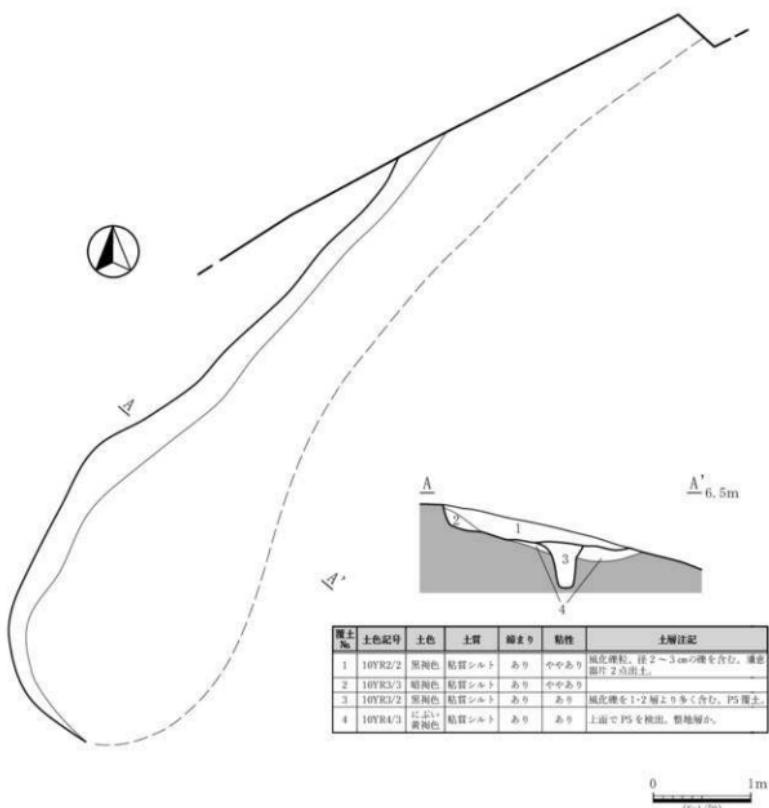


図29 猿喰東館跡 SX1 平面・断面図

【SX1】

調査地北部で検出された段切り状の落ち込みである。南東から北西へとN-43°-Eの方向へ延び、さらに調査区外北へと延びていく。検出面の標高は6.4m、底面標高は上端直下の底面が6.2mで、そこから南へ緩やかに下り、南端部では約5.8mを測る。規模は最大で幅約180cm、検出面からの深さ約20cmを測り、確認できた範囲での延長は約7.3mである。遺物は出土しなかった。

【SK1】

調査地中央付近で検出された土坑である。平面形は略円形、断面形は箱形を呈する円筒形の土坑である。平面規模はやや歪みがあるものの直径91~94cm、検出面からの深さ32cmを測る。検出面の標高は4.4m、底面標高は約4.1mを測る。遺物は出土しなかった。



図30 猿喰東館跡 SK1 平面・断面図

【SA1】

拡張区で検出された柱列である。P43,44,45 が直線上に並び、柱間は P43-44 間が 200 cm、P44-45 間が 180 cm を測る。検出面の標高は 4.55 m、検出面からの深さは P43 が 50 cm、P44 が 35 cm、P45 が 58 cm を測る。SD2 の南に近接して並行しており、あるいは P41,42 も含めて柵列となるものかもしれない。遺物は出土しなかった。

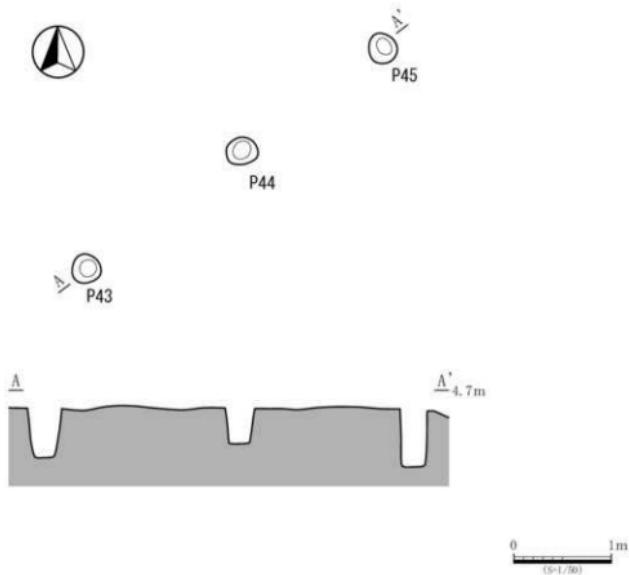
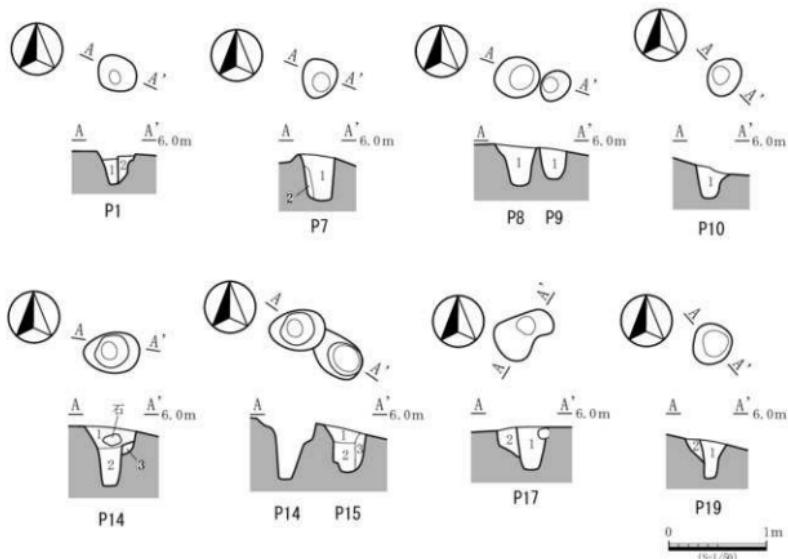


図31 猿喰東館跡 SA1 平面・断面図

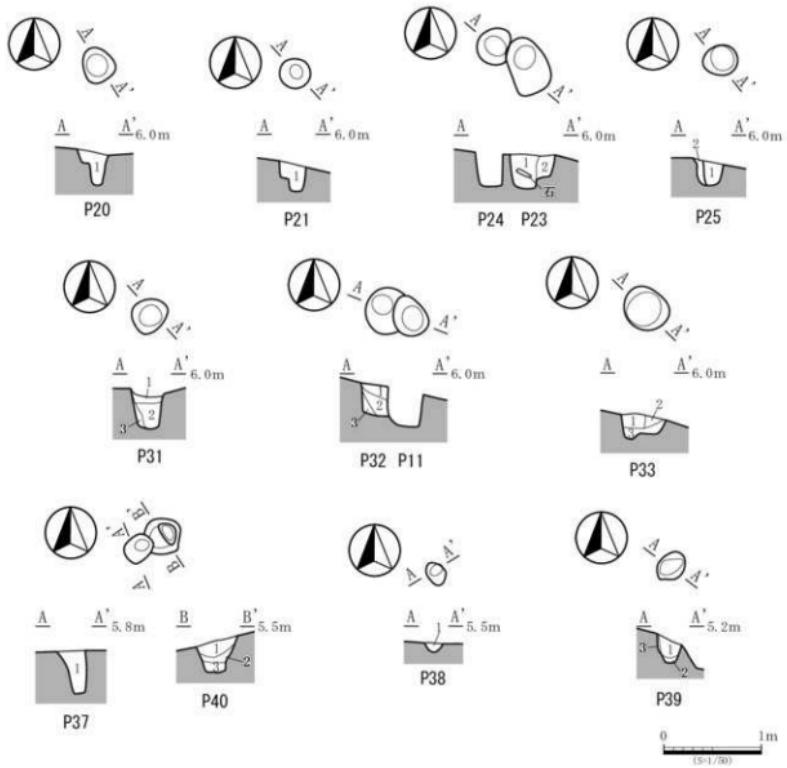


遺構No.	覆土No.	土色記号	土色	土質	根より	粘性	土壤注記	
							1	2
P1	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	ややあり	径2~3cmの塊合む。柱痕跡。	
	2	10YR5/4	にじい黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	城壁面少ブロックを含む。根なし。	
P7	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	城北面少ブロックを含む。根なし。	
	2	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	あり	強い	径3cmの塊をわずかに含む。	
P8	1	10YR2/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	灰白色地山と粒をわずかに含む。	
	2	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	灰白色地山と粒をわずかに含む。	
P9	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	灰白色地山と粒をわずかに含む。	
	2	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	灰白色地山と粒をわずかに含む。	
P10	1	10YR5/4	黒褐色	粘質シルト	あり	ややあり	径5cmの塊。風化砂粘土含む。地盤上1点出土。	
	2	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	径20cmの塊を含む。地盤上をわずかに含む。	
P14	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	地山土を少量含む。柱痕跡。	
	2	10YR3/3	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	地山土を多く含む。柱痕跡。	
	3	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	あり	強い	地山土を多く含む。柱痕跡。	
P15	1	10YR2/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	地山土を少量含む。灰化物を含む。	
	2	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	強い	地山土をわずかに含む。柱痕跡。	
	3	10YR4/6	褐色	粘質シルト	あり	ややあり		
P17	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	径10cmの塊を含む。地山土粒をわずかに含む。柱痕跡。	
	2	10YR4/3	にじい黄褐色	粘質シルト	強い	強い	地山土を少量含む。柱痕跡。	
P19	1	10YR2/3	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	地山土粒をわずかに含む。柱痕跡。	
	2	10YR4/3	にじい黄褐色	粘質シルト	あり	強い	地山土を少量含む。柱痕跡。	

図32 猿喰東館跡 P1 ~ 19 平面・断面図

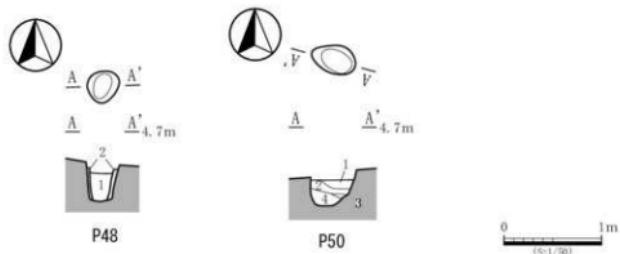
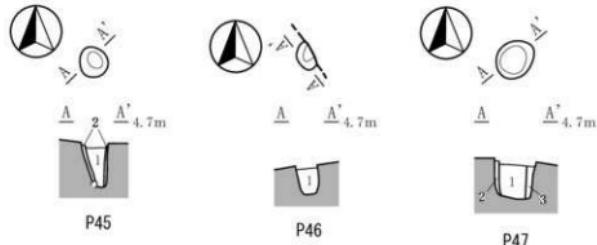
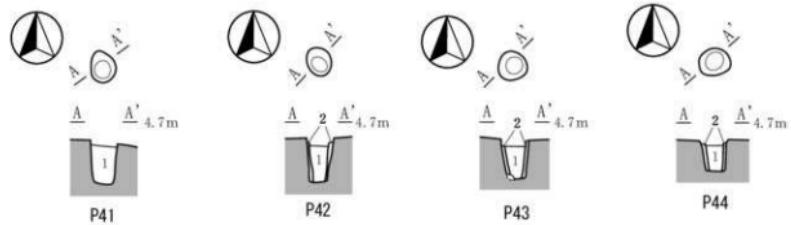
【ピット】

今回の調査では51基のピットを検出している。明らかな柱痕跡を残すものも見られたが、調査範囲が限られていることもあり、建物を構成する配列を発見するには至らなかった。P41 覆土中より茎の端部を欠失している刀子が1点出土している。



測線No.	層付No.	土色記号	土色	土質	礫まり	粘性	土解注記
P20	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	やかみあり	風化土を多く含む。
P21	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	堆山土を含む。
P23	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	やかみあり	堆山土をわざかに含む。角礫を含む。
	2	10YR3/4	にふく黄褐色	粘質シルト	あり	無い	
P25	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	柱状跡。
	2	10YR4/4	褐色	粘質シルト	あり	あり	断面。
P31	1	10YR3/4	暗褐色	粘質シルト	なし	無い	堆山土を多く含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	堆山土をわざかに含む。
	3	10YR4/3	にふく黄褐色	粘質シルト	無い	あり	堆山土を少く含む。
P32	1	10YR2/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	堆山土を多く含む。炭化物を含む。
	2	10YR4/3	にふく黄褐色	粘質シルト	無い	あり	堆山土を多く含む。炭化物を含む。
	3	10YR4/4	褐色	粘質シルト	なし	あり	侵入物多く均質な土。
P33	1	10YR2/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	堆山土を少く含む。
	2	10YR4/4	褐色	粘質シルト	あり	あり	黑褐色をわざかに含む。
	3	10YR4/3	にふく黄褐色	粘質シルト	無い	あり	侵入物多く均質な土。
P37	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	風化岩盤ブロックをわざかに含む。
	1	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	あり	あり	風化岩盤ブロックを多く含む。深5cm程の風化土を含む。
P40	2	10YR3/6	黒褐色	粘質シルト	なし	あり	にふく褐色土色入。風化岩盤ブロックをわざかに含む。
	3	10YR4/4	褐色	粘質シルト	やかみあり	あり	黒褐色土色入。
P38	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	風化岩盤ブロックを含む。
	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	あり	風化岩盤ブロックをわざかに含む。
P39	2	10YR3/6	黒褐色	粘質シルト	やかみあり	あり	褐色土色入。
	3	10YR4/4	褐色	粘質シルト	あり	あり	

図33 猿娘東館跡 P20 ~ 40 平面・断面図



測線No.	断面No.	土色記号	土色	土質	縫まり	粘性	土層注記
P41	1	10YR4/3	にふい黄褐色	粘質シルト	ややあり	ややあり	灰白色岩盤ブロックを多く含む。20cm大的隙含む。刀子出土。
P42	1	10YR5/2	灰黃褐色	粘質シルト	弱い	あり	灰白色岩盤ブロックを多く含む。柱根跡。
	2	10YR7/4	にふい黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	にふい黄褐色土・灰白色土混入。網方。
P43	1	10YR3/4	暗褐色	粘質シルト	弱い	あり	灰白色岩盤ブロックをわずかに含む。柱根跡。
	2	10YR7/4	にふい黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	にふい黄褐色土・灰白色土混入。網方。
P44	1	10YR3/4	暗褐色	粘質シルト	弱い	あり	灰白色岩盤ブロックをわずかに含む。柱根跡。
	2	10YR7/4	にふい黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	にふい黄褐色土・灰白色土混入。網方。
P45	1	10YR2/3	黒褐色	粘質シルト	ややあり	あり	灰白色岩盤ブロックを含む。柱根跡。
	2	10YR7/4	にふい黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	にふい黄褐色土・灰白色土混入。網方。
P46	1	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	ややあり	ややあり	灰白色岩盤ブロックを含む。
P47	1	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	ややあり	あり	灰白色岩盤ブロックを多く含む。柱根跡。
	2	10YR7/4	にふい黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	灰白色岩盤ブロックを多く含む。柱根跡。
	3	10YR6/4	にふい黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	灰白色岩盤ブロックをやや多く含む。網方。
P48	1	10YR5/3	黒褐色	粘質シルト	なし	ややあり	灰白色岩盤ブロックを多く含む。柱根跡。
	2	10YR7/6	暗褐色	粘質シルト	なし	あり	灰白色岩盤土の露化。
P49	1	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	ややあり	ややあり	灰白色岩盤ブロックを多く含む。
	2	10YR6/6	明褐色	粘質シルト	あり	ややあり	灰白色岩盤ブロックを多く含む。
	3	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	なし	あり	灰白色岩盤ブロックを多く含む。
	4	10YR7/4	にふい黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	灰白色土・明褐色土混入。
P50							0 1m (S-1, 30)

図34 猿喰東館跡P41～50平面・断面図

表13 猿喰東館跡遺構計測表

※〔 〕内値は残存数値

遺構名	平面規模(cm)		検出面からの深さ(cm)
	長軸(長さ)	短軸(幅)	
SD1		欠番	
SD2	[860]	112	29
SX1	[740]	226	21
SX2	[409]	[310]	83
SK1	94	91	32
P1	42	37	33
P2	44	36	40
P3	25	24	36
P4	30	17	10
P5	39	35	46
P6	31	25	25
P7	40	36	47
P8	47	41	42
P9	33	27	32
P10	39	32	34
P11	42	34	41
P12	48	33	53
P13	31	25	28
P14	55	41	61
P15	[50]	40	48
P16	40	38	37
P17	61	43	44
P18	30	24	26
P19	42	40	41
P20	35	32	37
P21	31	30	32
P22	40	34	28
P23	57	38	35
P24		38	32
P25		36	31
P26		[35]	33
P27		35	33
P28		38	36
P29		44	36
P30		42	32
P31		37	33
P32		47	[35]
P33		48	41
P34		[33]	32
P35		29	24
P36		34	31
P37		31	25
P38		25	18
P39		33	26
P40		39	[37]
P41		32	25
P42		30	25
P43		30	29
P44		31	28
P45		31	28
P46		27	[17]
P47		42	36
P48		34	30
P49		19	18
P50		46	29
P51		25	[21]

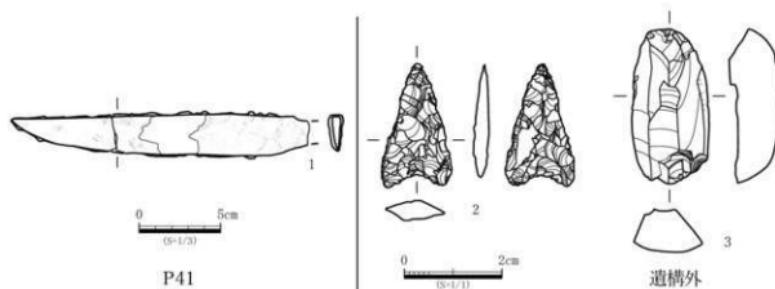


図35 猿喰東館跡出土遺物

表14 猿喰東館跡出土遺物観察表

辨認No	出土位置	種別	材質	遺存度	法量(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
35-1	P41	刀子	鉄	基部欠	[18.3]	2.7	0.5	全曲的に鋒の削減著しい。片刃か。
35-2	Ⅱ層	石器	硬質頁岩	完形	2.4	1.4	0.4	
35-3	Ⅱ層	石核	麻績	完形	3.0	1.5	1.0	



調査地現況（東から）



T1 全景（南から）



T2 全景（北から）



T2 SX1 検出状況（西から）



T2 SX1、ピット群完掘状況（西から）



拡張区 遺構検出状況（南から）



拡張区 全景（西から）



P41 刀子出土状況（南から）



拡張区 SK1 堆積土層（南から）



拡張区 SK1 完掘（南から）



T3 全景（南から）



T3 SX2（南から）



T4 全景（南から）



T5 全景（南から）



1

P41 出土遺物



2



2



3

遺構外 出土遺物

第10章 星谷遺跡

遺跡名：星谷遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59104）

所在地：気仙沼市岩月星谷

調査原因：最知川原第二地区防災集団移転促進事業

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：平成27年2月18日～同年2月25日

対象面積：1,800 m²

調査面積：278 m²

調査員：野崎進

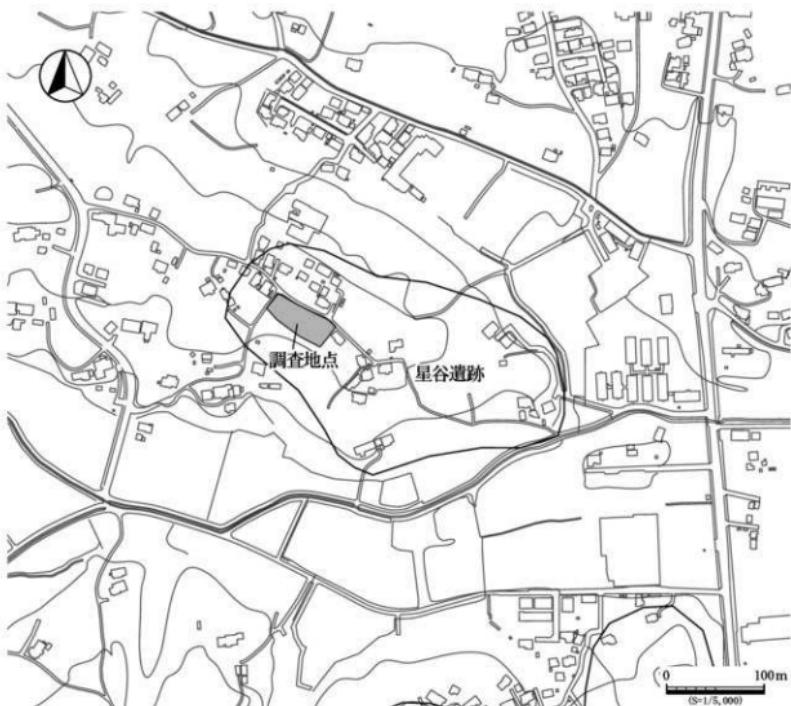


図36 星谷遺跡 調査地点位置図

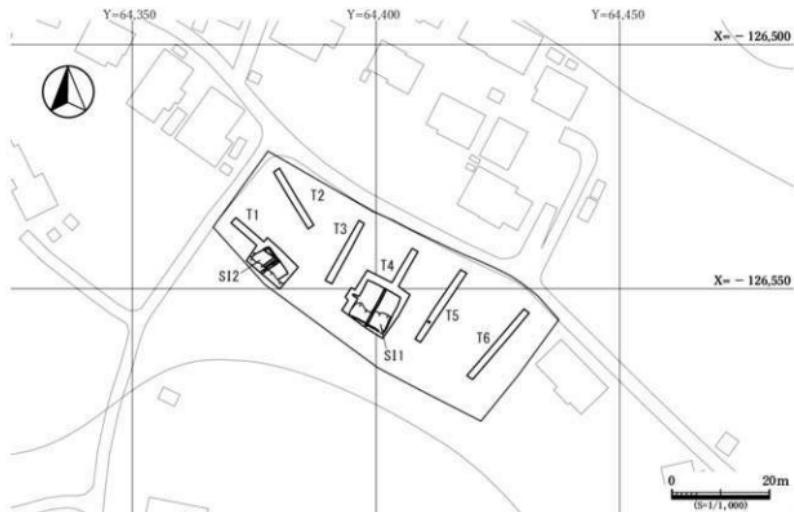


図 37 星谷遺跡 調査区配置図

表 15 星谷遺跡調査区一覧

調査区番号	規模 (m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
T1	6.4	16.4	記録なし	有	S12 を検出。
T2	1.5	13.7	記録なし	無	
T3	1.5	14.1	記録なし	無	
T4	10.4	19.0	記録なし	有	S11 を検出。
T5	1.6	17.1	記録なし	無	
T6	1.5	18.0	記録なし	無	

1. 調査に至る経緯

星谷遺跡は市域中央付近の標高3～26m程の丘陵東端部に立地し、東方約500mに気仙沼湾を臨む。平成24年度に実施された発掘調査の成果から、西部の遺跡範囲が拡張された。

今回の調査は、星谷遺跡内西部での防災集団移転促進事業に係る住宅団地造成工事に伴い、確認調査を実施したものである。

2. 調査成果

調査対象地は、星谷遺跡の丘陵頂部から南に下る緩い南斜面であり、現況は山林である。主として等高線の直交方向に調査区を計6箇所設定し、便宜的にT1～6の調査区名を付して確認調査を実施した。

表土層直下が自然堆積の黄褐色粘質シルトの基盤層であり、この上面で遺構確認を行った結果、古代の竪穴住居跡2棟を発見した。以下に検出遺構の説明を加える。

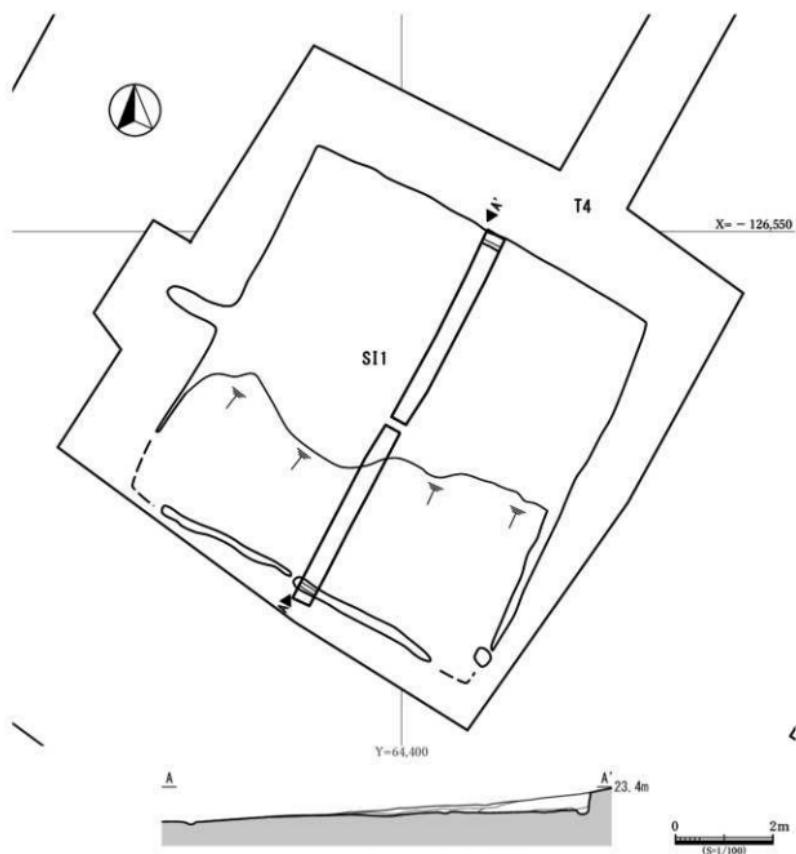


图38 星谷遗迹 SI1 平面·断面图

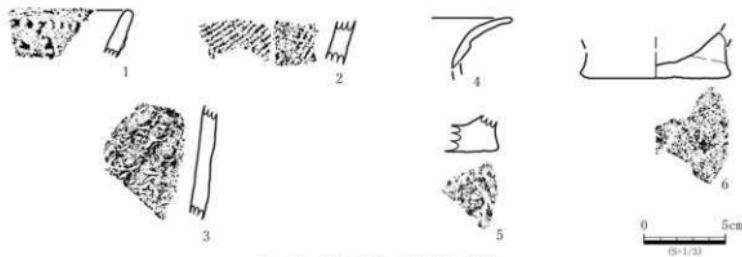


图39 星谷遗迹 SI1 出土遗物

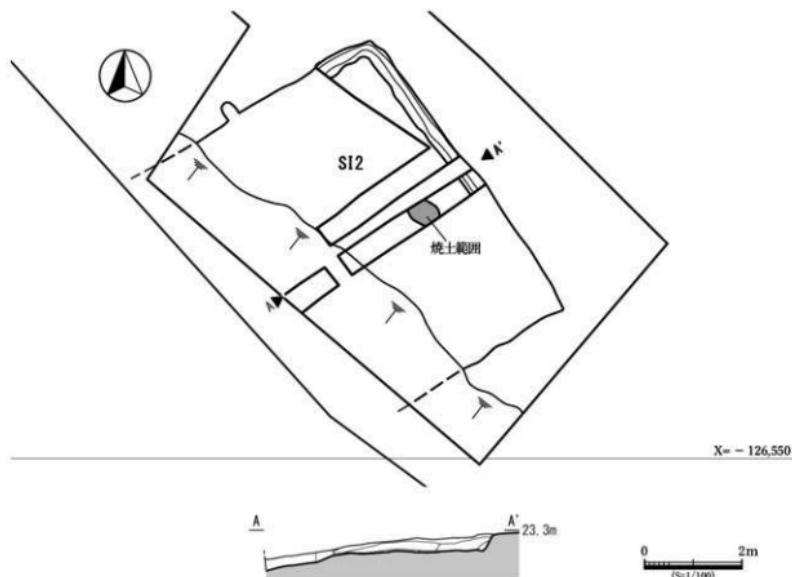


図40 星谷遺跡 SI2 平面・断面図

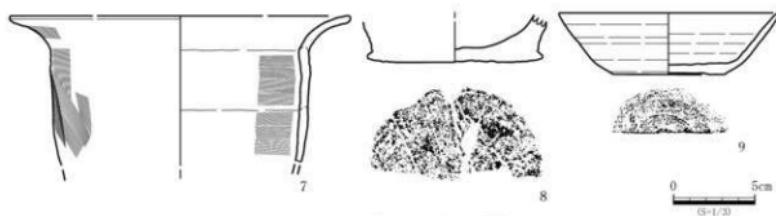


図41 星谷遺跡 SI2 出土遺物

【SI1】

一辺約7.7mの方形で、西辺中央部にカマドが設けられる。部分的に裁ち割りを行った結果、床面までの深さは約35cmを測り、壁周溝が巡ることを確認した。出土遺物は、混入と思われる縄文土器片3点のほか、古代の土師器甕片3点が出土している。

【SI2】

南半部は後後に削平された斜面となり失われているが、一辺6.7mほどの方形と推測される。カマドは西辺中央部に設けられている。部分的に裁ち割りを行った結果、床面までの深さは約35cmを測ることが分かった。また、床面直上で焼土が検出されているほか、北西角部を一部掘削し、壁周溝が

巡ることを確認している。出土遺物は土師器甕片 2 点のほか、搬入系と思われる灰白色土師器环が 1 点出土している。

表 16 星谷跡遺出土器観察表

辨認No	出土位置	種別	器種	法量(cm)			特徴
				口径	底径	高さ	
39-1	SI1	圓文土瓶	深甕	—	—	(2.9)	隣碑文→キザシ。
39-2	SI1	圓文土瓶	深甕	—	—	(2.8)	隣文(LR)。
39-3	SI1	圓文土瓶	深甕	—	—	(6.6)	隣文。
39-4	SI1	土師甕	甕	—	—	(3.1)	胎土淡褐色。裏母少量。白色針状粒を微量含む。内・外両ナデ。
39-5	SI1	土師甕	甕	—	—	(3.0)	胎土淡褐色。裏母・白色針状粒を少量含む。底面木葉痕残る。
39-6	SI1	土師甕	甕	—	(9.2)	(2.8)	胎土淡褐色。裏母・白色針状粒を少量含む。外面ナデ。底面木葉痕残る。
41-7	SI2	土師甕	甕	(21.0)	—	(9.0)	胎土淡褐色。裏母少量。長石・白色針状粒を微量含む。外面ハツメ。内面口縁部ナデ・株部ナメ。
41-8	SI2	土師甕	甕	—	(10.8)	(2.5)	胎土橙色。裏母・長石・白色針状粒を少量含む。内外両ナデ。底面木葉痕残る。
41-9	SI2	土師甕	环	(13.4)	(7.0)	3.8	胎土灰白色。ロクロ成形。底部へラ切り。搬入土瓶。



SI1 (南東から)



SI2 (南東から)



SI1 出土遺物



SI2 出土遺物

第11章 杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡

遺跡名：杉の下貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号 59030）

波路上西館跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59036）

杉の下南遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59096）

波路上西遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59097）

所在地：気仙沼市波路上杉の下

調査原因：農山漁村地域復興基盤総合整備事業（杉の下工区）

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：平成26年12月15日～平成27年2月2日

対象面積：273,000 m²

調査面積：1,304 m²

（杉の下貝塚 464 m²、波路上西館跡・波路上西遺跡 566 m²、杉の下南遺跡 274 m²）

調査員：昆野賢一、野崎進、石川郁

相原淳一、細川金也、高橋洋彰（宮城県支援）

1. 調査に至る経緯

杉の下貝塚は市域南東部の標高12m程の微高地に立地し、波路上西館跡・波路上西遺跡は、杉の下貝塚の立地する微高地とは小谷で隔てられた南側、杉の下貝塚から南西約200mの標高約12mを測る微高地に立地している。また、杉の下南遺跡は波路上西館跡から50mほど東の、標高1～10mを測る微高地東端部分に立地している。これらの遺跡ではこれまで本格的な発掘調査が行われたことがなく、遺跡の情報はきわめて少ない。

農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴い、杉の下工区では杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡が事業計画範囲に含まれることから、確認調査を実施した。

2. 調査成果

杉の下貝塚

杉の下貝塚では、調査区を計23箇所設定し、便宜的にST1～23の調査区名を付して確認調査を実施した。

調査の結果、ST4,5,12,13で混貝層、ST22で製塩土器廃棄遺構が検出された。また、ST6～10では比較的大型の遺構プランも検出されているが、検出できた範囲は遺構のごく一部に限られる上、掘削を行っていないため、現状では性格不明遺構というほかない。

【SX1】

ST6で検出された。東西2.9m×南北1.8m以上の規模をもち、略円形を呈するものと思われる。

覆土は黒色土である。調査区壁面の観察から比較的急激に落ち込む様子が確認され、竪穴状もしくは井戸状の遺構である可能性が考えられる。

【SX2】

ST7で検出された。東西2.6m×南北2.0m以上の規模をもち、検出した範囲では不定形を呈する。覆土は褐色ないし暗褐色土である。

【SX3】

ST8で検出された。東西4.0m以上×南北2.3m以上の規模をもち、検出した範囲では方形に近い不定形を呈する。覆土は黄褐色土の混入する黒褐色土である。本址南辺付近に焼土範囲を検出しているが、本址に伴うものか、別遺構となるものか判然としない。

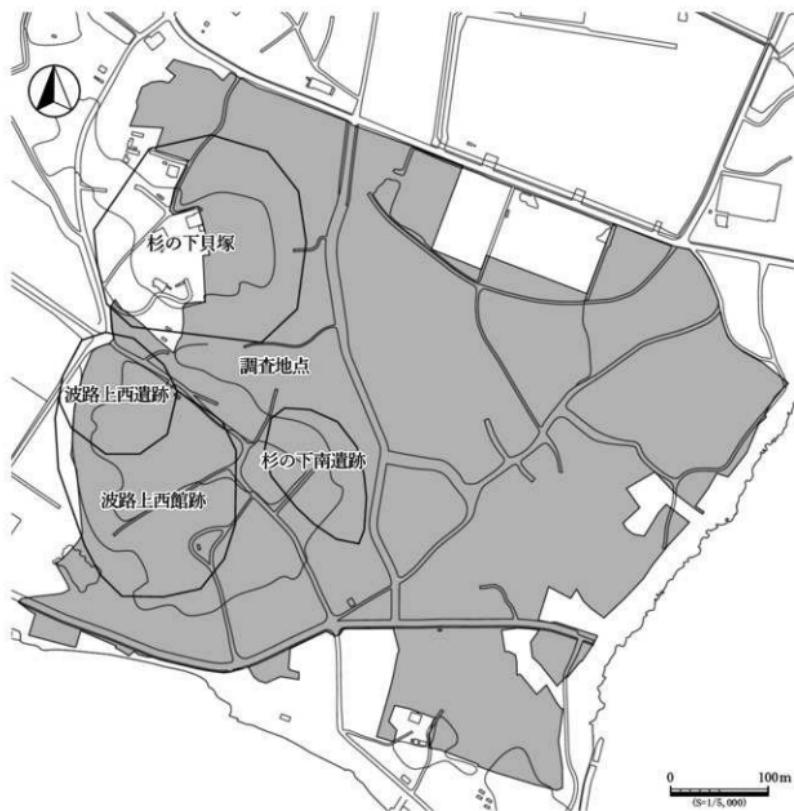


図42 杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡 調査地点位置図

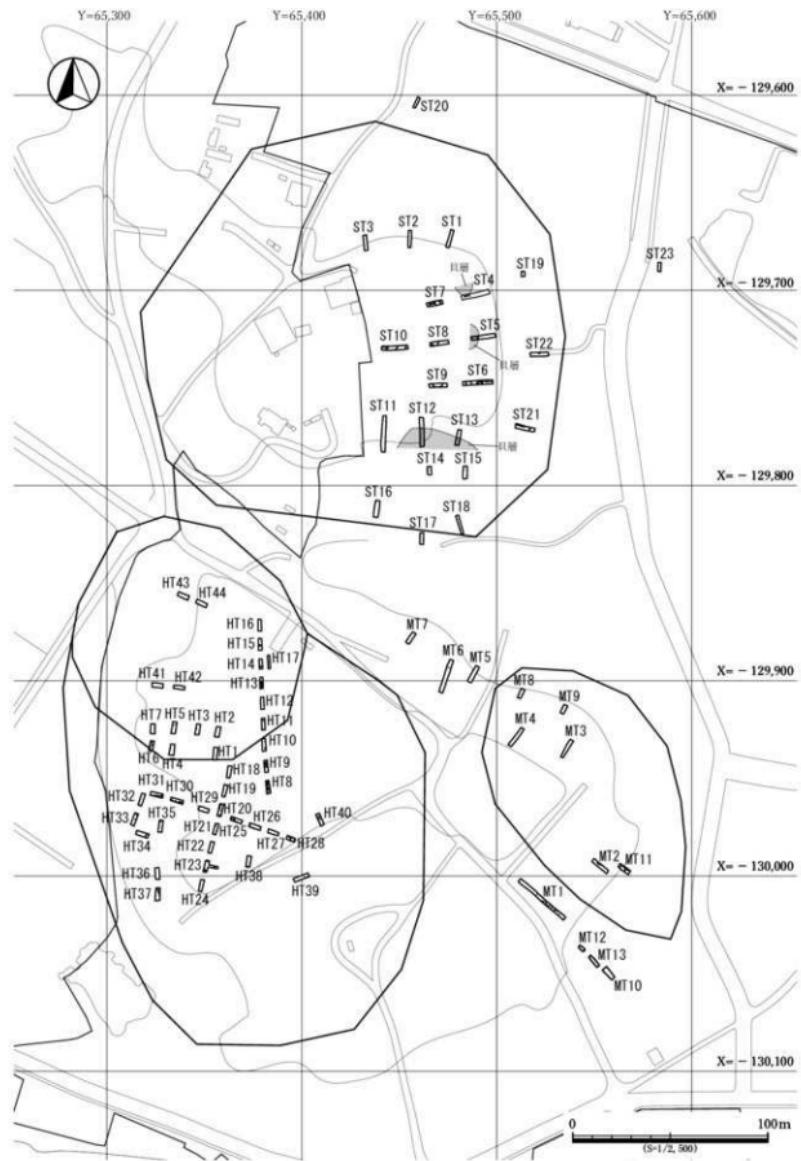


図43 杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡 調査区配置図

表17 杉の下貝塚調査区一覧

調査区番号	規模 (m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
ST1	2.0	10.0	0.40	無	
ST2	2.0	10.0	0.40	無	
ST3	2.0	9.0	0.30	無	
ST4	2.0	15.0	0.20	有	混シルト貝層、小穴、土坑
ST5	2.0	13.0	0.45	有	混シルト貝層、小穴
ST6	2.0	16.0	0.20	有	性格不明遺構、小穴、土坑、埋甕等
ST7	2.0	9.0	0.05	有	性格不明遺構、小穴、土坑
ST8	2.0	10.0	0.15	有	豊穴住居跡、小穴
ST9	2.0	10.0	0.10	有	豊穴住居跡
ST10	2.0	14.0	0.15	有	性格不明遺構、土坑
ST11	2.0	19.5	0.35	有	小穴、焼土
ST12	2.0	16.0	0.20	有	混シルト層
ST13	2.0	9.0	0.20	有	混貝シルト層
ST14	2.0	2.5	0.40	無	
ST15	2.0	7.0	0.60	無	
ST16	2.0	9.5	0.14 ~ 0.24	無	
ST17	2.0	6.0	1.45	有	
ST18	2.0	10.0	1.00	有	
ST19	2.0	3.0	1.40	無	地山未検出
ST20	2.0	11.0	2.00	有	
ST21	2.0	10.0	0.50 ~ 0.60	無	
ST22	2.0	10.0	0.58 ~ 0.80	有	土坑、製塙土器廃棄遺構
ST23	2.0	5.5	1.25	無	

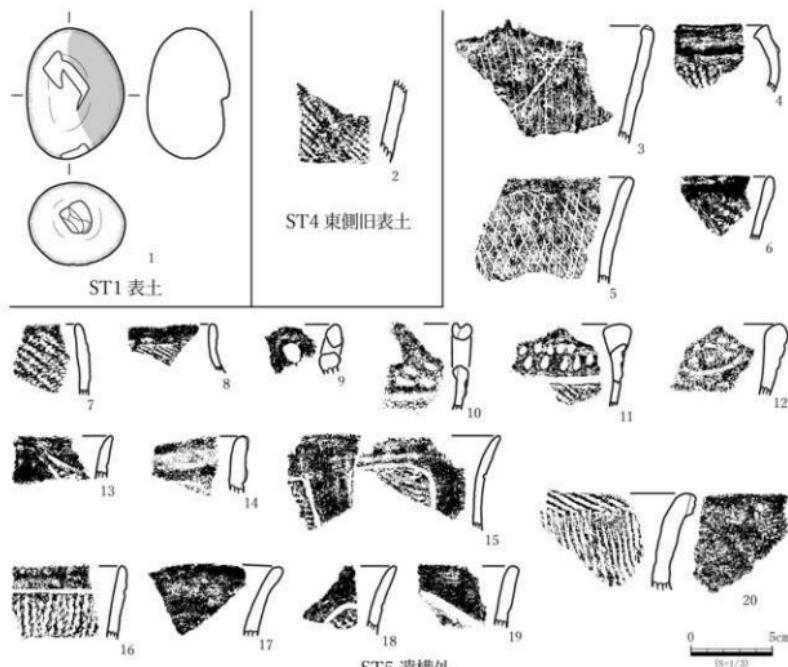


図44 杉の下貝塚ST1,4,5出土遺物

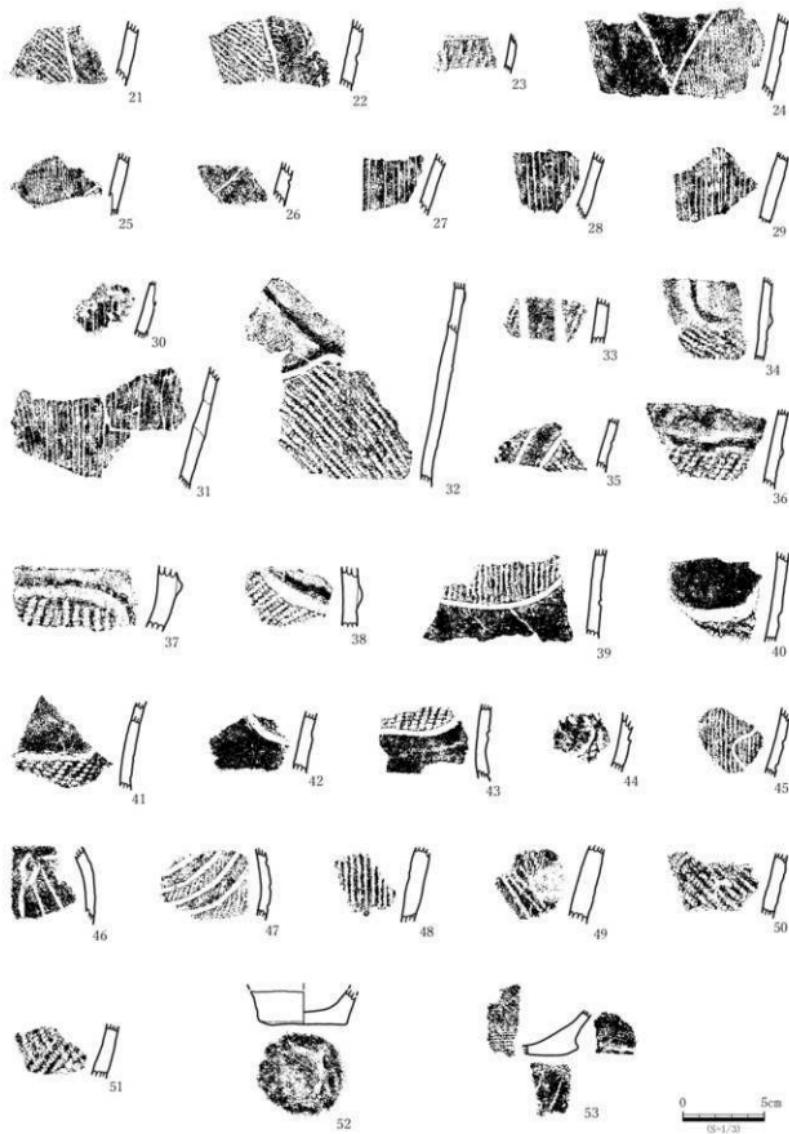


図 45 杉の下貝塚 ST5 遺構外出土遺物

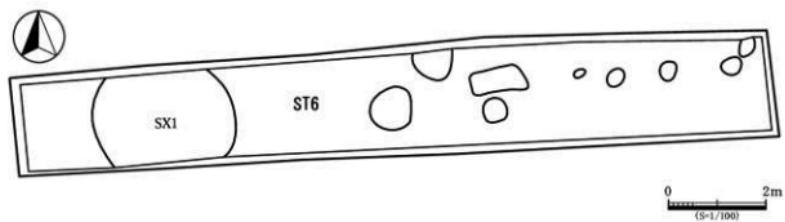


図46 杉の下貝塚 ST6 平面図

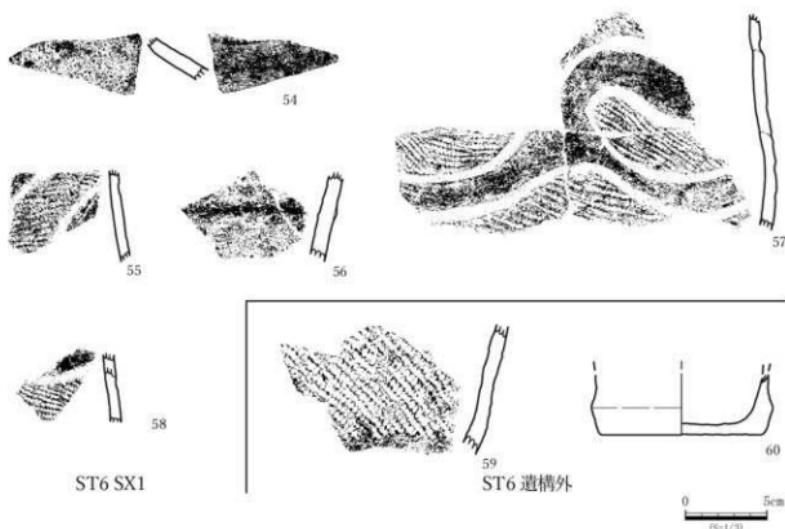


図47 杉の下貝塚 ST6 出土遺物

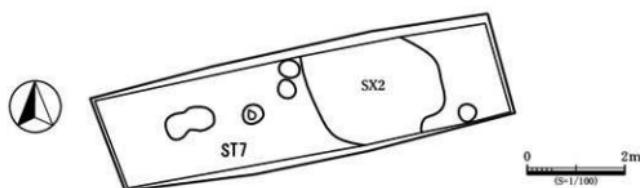


図48 杉の下貝塚 ST7 平面図

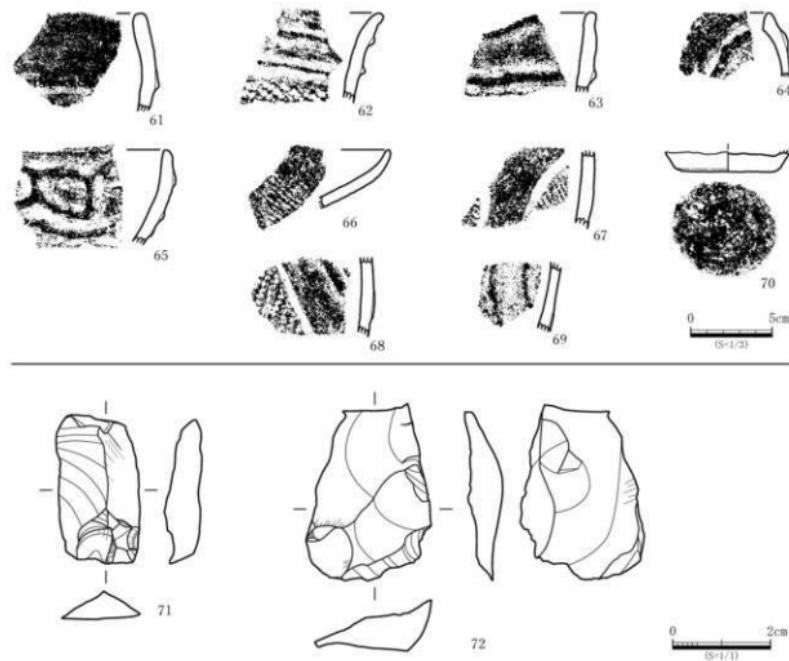


図49 杉の下貝塚 ST7 遺構外出土遺物

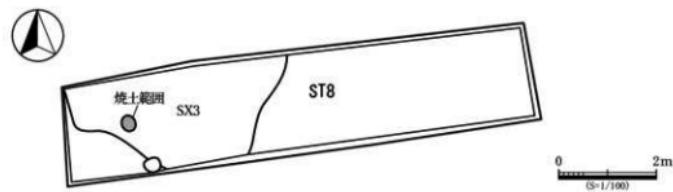


図50 杉の下貝塚 ST8 平面図



図51 杉の下貝塚 ST8 遺構外出土遺物

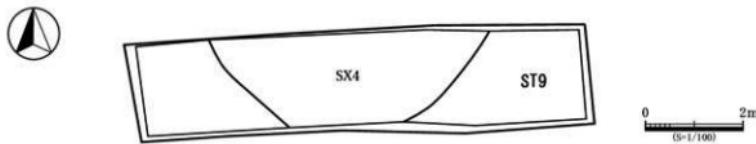


図52 杉の下貝塚ST9 平面図



図53 杉の下貝塚ST9 遺構外出土遺物

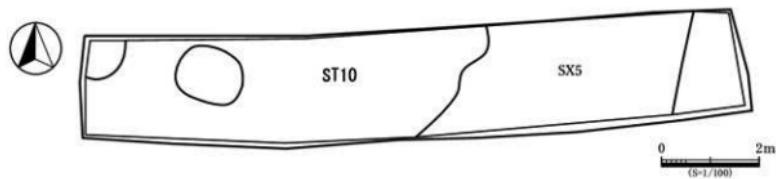


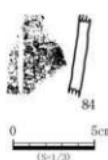
図54 杉の下貝塚ST10 平面図



ST10 遺構外

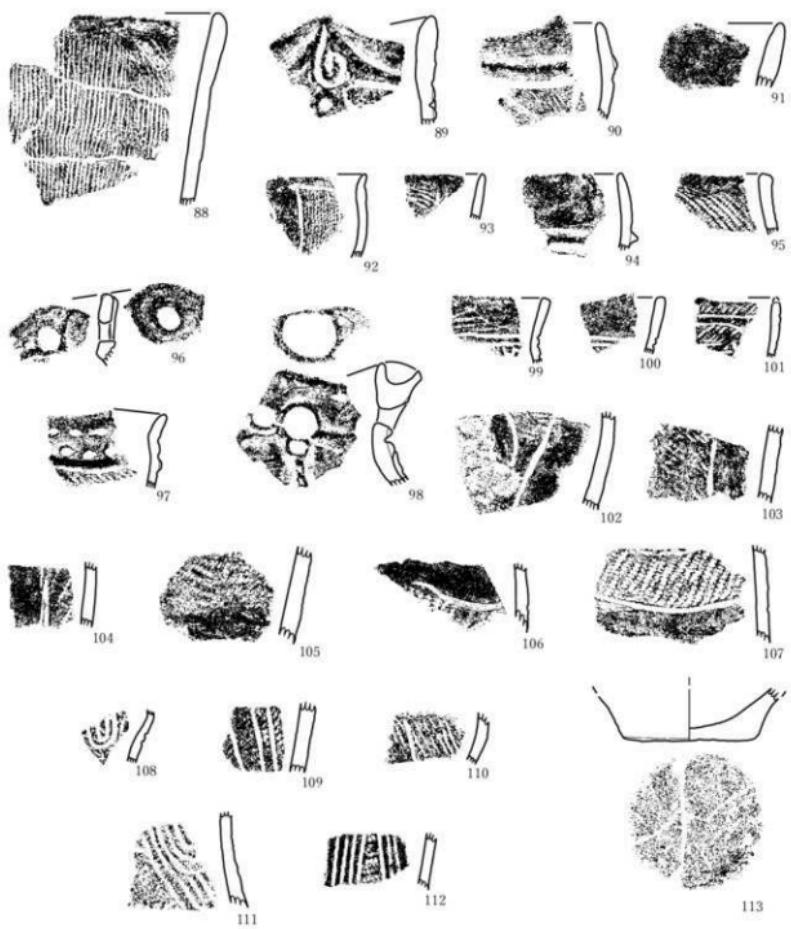


ST12 遺構外



ST13 遺構外

図55 杉の下貝塚 ST10,12,13 遺構外出土遺物



ST21 包含層



図 56 杉の下貝塚 ST21 包含層出土遺物①

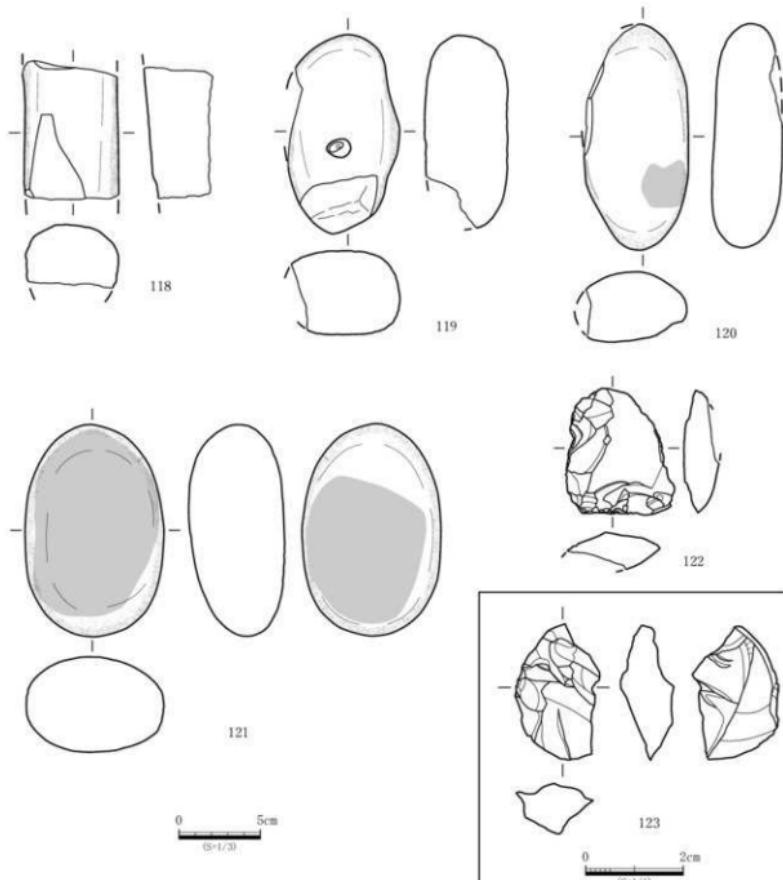


図 57 杉の下貝塚 ST21 包含層 出土遺物②

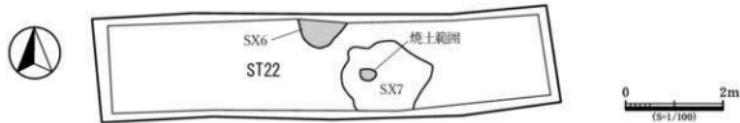


図 58 杉の下貝塚 ST22 平面図

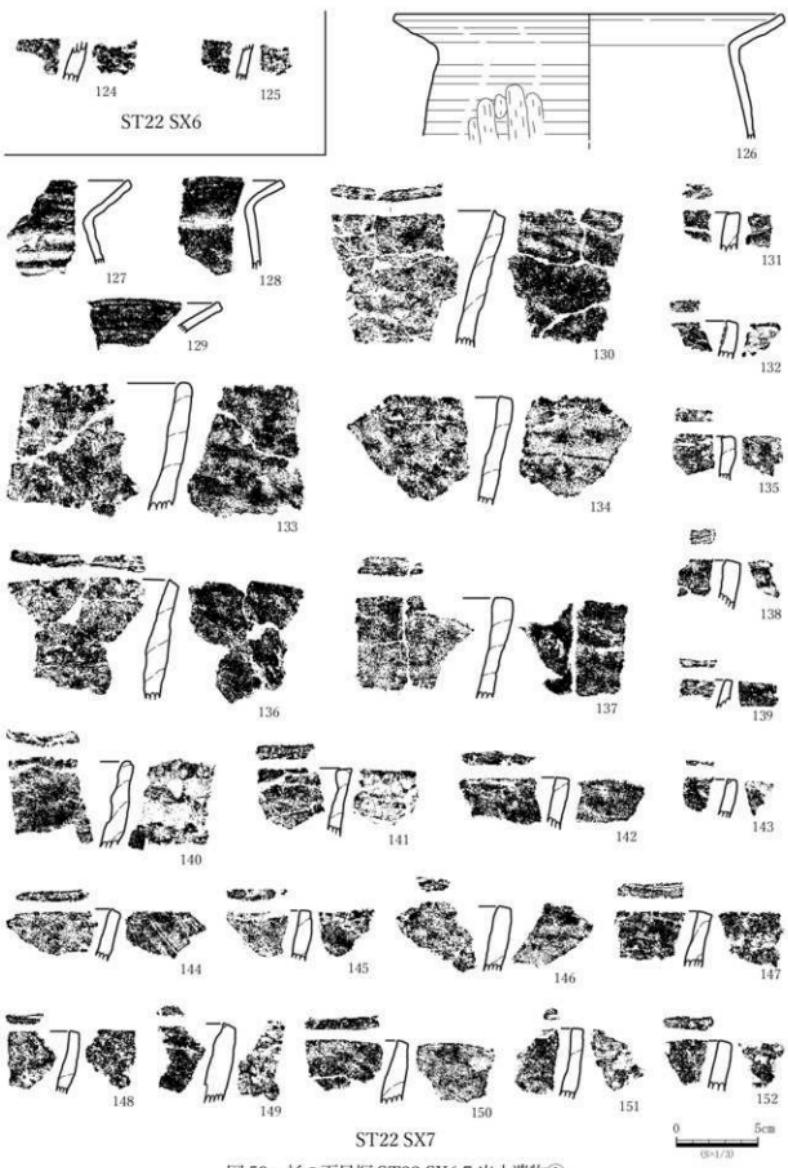


図59 杉の下貝塚 ST22 SX6,7 出土遺物①

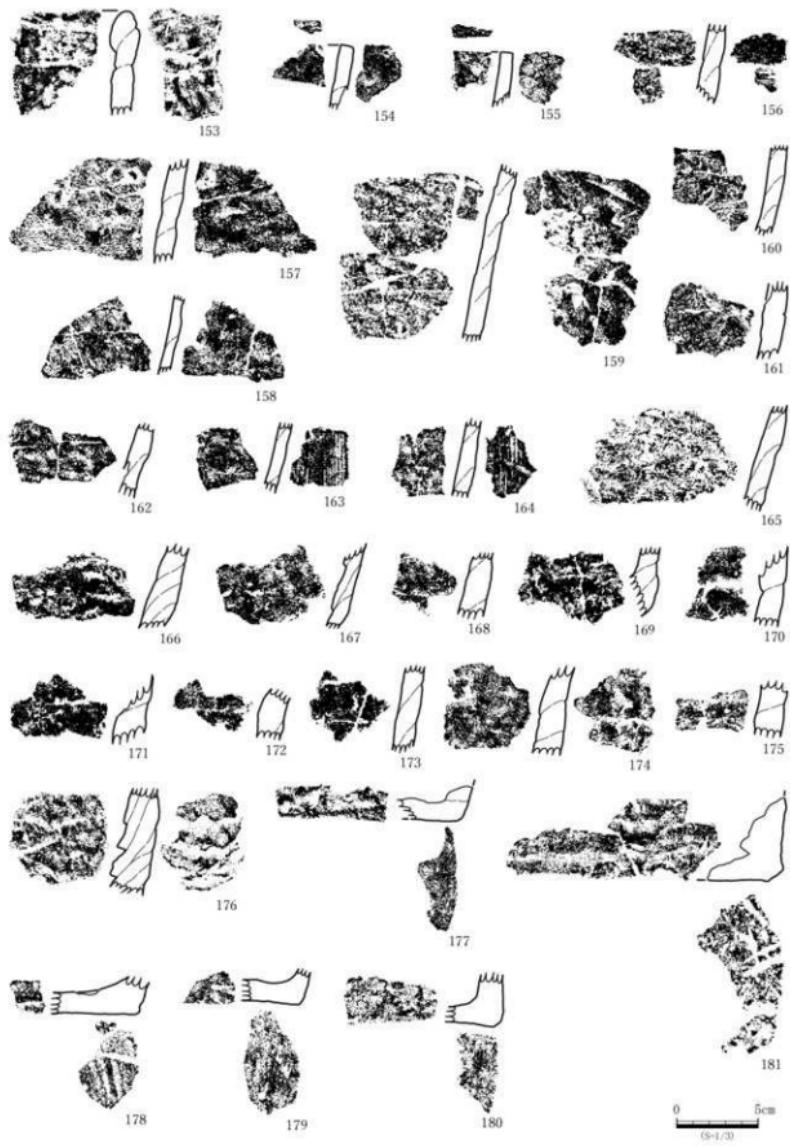


図60 杉の下貝塚 ST22 SX7 出土遺物②

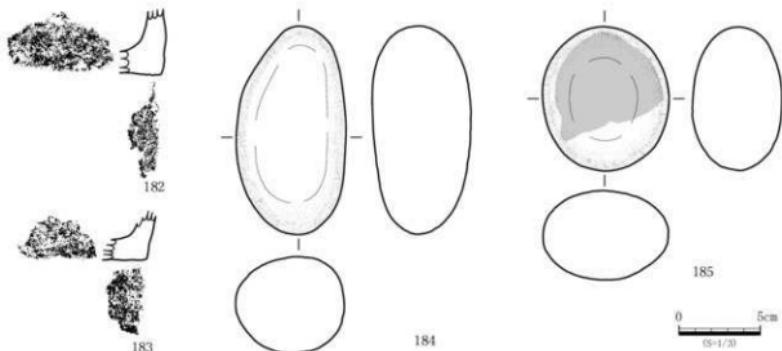


図 61 杉の下貝塚 ST22 SX7 出土遺物③

【SX4】

ST9で検出された。東西3.1m以上×南北2.5m以上の規模をもち、方形もしくは梢円形を呈するものと思われる。竪穴住居跡の可能性も考えられるが、調査範囲ではカマドなどの付帯施設は検出されなかつたため、性格不明遺構として扱った。覆土は暗褐色土である。

【SX5】

ST10で検出された。東西4.3m×南北2.2m以上の規模をもつ。竪穴住居跡の可能性もあるが、西辺のプランが直線的ではなく歪みが大きく、溝跡等であることとも考えられる。東辺の軸方位はN-12°-Eを指す。覆土は黒褐色土である。

【SX6】

ST22で検出された。東西1.0m×南北0.5m以上の規模をもち、円形もしくは梢円形を呈するものと思われる。覆土は焼土粒や小礫を少量含む黒褐色土である。下層に10cmほどの厚さをもつ焼土層が検出され、炉跡と考えられる。掘方の深さは掘り込み面から25cm前後を測る。

【SX7】

ST22で検出された。東西1.9m×南北1.4m以上の規模をもつ略円形の範囲に、礫や製塙土器片が集積した状態で検出されたものである。礫等を除去する過程で、東西32cm×南北25cmを測る略円形の焼土範囲を検出しているが、同一面上に礫が埋まっている状態のものも見られ、炉跡となるものか単に焼土を廃棄したものか判然としない。

波路上西館跡・波路上西遺跡

波路上西館跡・波路上西遺跡では、調査区を計44箇所設定し、便宜的にHT1～44の調査区名を付して確認調査を実施した。

調査の結果、HT10で縄文時代早期の土器を含む炉跡、HT23で古代の竪穴建物跡が検出されたほか、HT3,11,26では年代不明ではあるが柱痕跡を有する小穴など、年代不詳の遺構群が多数検出さ

れている。

[SI1]

HT23で検出された。東西5.8m×南北5.2mの方形で、北壁中央部にカマドが設けられている。主軸方位はN-8°-Wを指す。表土を除去したところで床面がほぼ露出している状況であり、壁周溝が巡ることを確認した。現代の削平によりカマドも大きく削平されており、焚口の焼土面と、袖部がわずかに遺存していることを確認できたのみである。

[SX1]

HT10で検出された。東西51cm×南北58cmの規模をもち、楕円形を呈する。覆土は繩文土器を含む赤褐色土の焼土層で、炉跡と考えられる。土器は早期のものであり、時期的なことを考慮すると炉穴である可能性も考えられるが、検出できたのは焼土範囲のみであり、現代の削平によるものか周

表18 波路上西館跡・波路上西遺跡調査区一覧

調査区番号	規模 (m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
HT1	2.0	7.0	0.24 ~ 0.32	無	
HT2	2.0	6.0	0.12 ~ 0.50	無	
HT3	2.0	6.0	0.10 ~ 0.42	有 ピット1基（柱痕跡有り）	
HT4	2.0	6.0	0.12 ~ 0.20	無	
HT5	2.0	7.0	0.10 ~ 0.25	無	
HT6	2.0	6.0	0.10 ~ 0.26	無	
HT7	2.0	5.5	0.10 ~ 0.33	無	
HT8	2.0	7.0	0.30 ~ 0.43	有 小穴多数	
HT9	2.0	7.0	0.13	有 土坑4基	
HT10	2.0	7.0	0.05 ~ 0.08	有 SX1より土器出土	
HT11	2.0	6.0	0.05 ~ 0.15	有 ピット2基（柱痕跡有り）	
HT12	2.0	6.0	0.05 ~ 0.13	無	
HT13	2.0	6.0	0.14 ~ 0.20	有 遺構多数	
HT14	2.0	5.5	0.12 ~ 0.17	有 土坑1基	
HT15	2.0	6.0	0.15	有 小穴1基、溝1条	
HT16	2.0	6.0	0.13 ~ 0.15	無	
HT17	2.0	7.0	0.38 ~ 0.44	有 小穴1基	
HT18	2.0	7.0	0.12	無	
HT19	2.0	7.0	0.10 ~ 0.20	有 土坑1基	
HT20	2.0	7.0	0.48 ~ 0.65	有 土坑・小穴10基	
HT21	2.0	6.0	0.25 ~ 0.44	有 土坑1基、溝1条	
HT22	2.0	6.0	0.10	無	
HT23	2.0	7.0	0.10 ~ 0.14	有 整穴住居跡（古代）	
HT24	2.0	6.0	0.14 ~ 0.20	無	
HT25	2.0	6.0	0.06 ~ 0.25	有 小穴4基、土坑1基	
HT26	2.0	7.0	0.08 ~ 0.15	有 ピット2基（P1柱痕跡有り）、土坑1基	
HT27	2.0	6.0	0.16 ~ 0.20	無	
HT28	2.0	5.0	0.17 ~ 0.23	有 土坑1基、小穴2基	
HT29	2.0	6.0	0.89	無	
HT30	2.0	7.0	0.08 ~ 0.13	有 土坑・小穴9基	
HT31	2.0	7.0	0.08 ~ 0.16	有 土坑・小穴12基	
HT32	2.0	7.0	0.23 ~ 0.30	有 溝1条	
HT33	2.0	7.5	0.34 ~ 0.47	有 土坑1基、小穴1基	
HT34	2.0	7.0	0.10 ~ 0.15	無	
HT35	2.0	6.0	0.18 ~ 0.20	有 土坑・小穴3基	
HT36	2.0	6.0	0.08 ~ 0.10	無	
HT37	2.0	7.0	0.08 ~ 0.13	無	
HT38	2.0	6.0	0.25	無	
HT39	2.0	9.0	0.10	有 遺物包含層、小穴	
HT40	2.0	7.0	0.20	有 小穴	
HT41	2.0	6.0	0.18	無	
HT42	2.0	6.0	0.12	無	
HT43	2.0	6.0	0.10 ~ 0.23	無	
HT44	2.0	6.0	0.06 ~ 0.10	無	

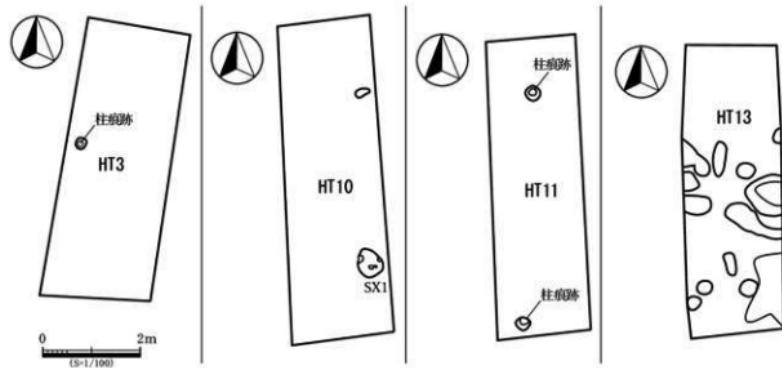


图 62 波路上西館跡・波路上西遺跡 HT3,10,11,13 平面図

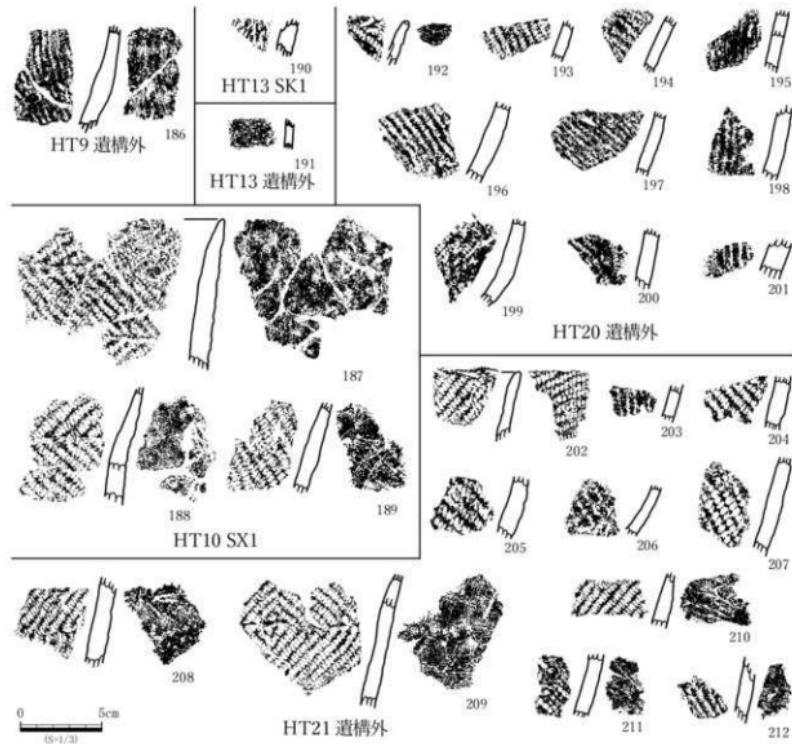


图 63 波路上西館跡・波路上西遺跡 HT9,10,13,20,21 出土遺物

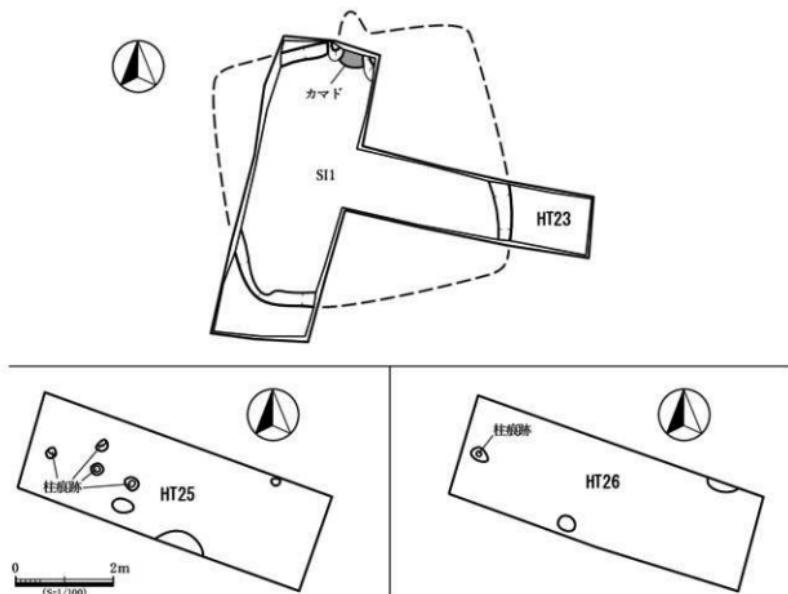


図64 波路上西館跡・波路上西遺跡 HT23,25,26 平面図

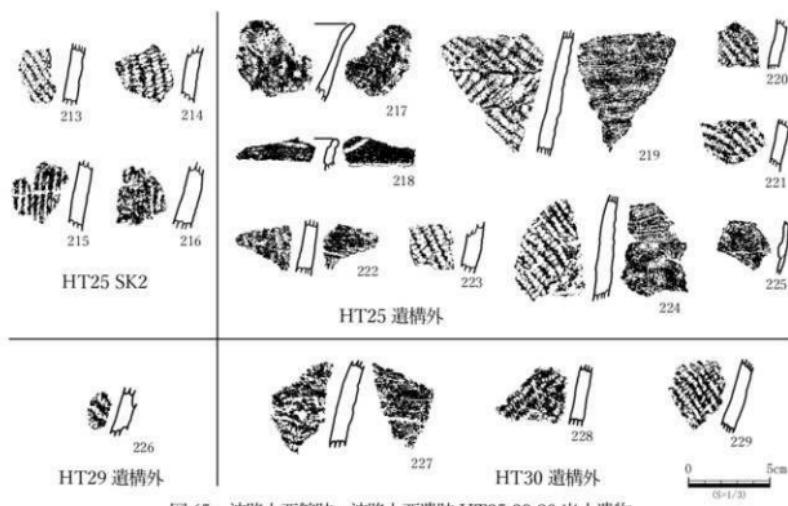


図65 波路上西館跡・波路上西遺跡 HT25,29,30 出土遺物

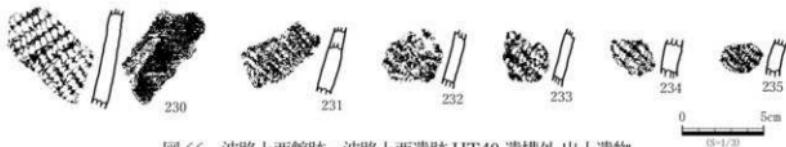


図 66 波路上西館跡・波路上西遺跡 HT40 遺構外出土遺物

表 19 杉の下南遺跡調査区一覧

調査区番号	規模 (m)		検出面までの深さ (m)	遺構の有無	備考
	幅	長さ			
MT1	2.0	31.0	0.80	有	溝跡、土坑(江戸時代)
MT2	2.0	10.0	1.10 ~ 1.25	有	壁穴住居跡
MT3	2.0	11.0	1.40 ~ 1.45	無	
MT4	2.0	12.0	0.35	無	
MT5	2.0	11.0	0.32 ~ 0.55	無	
MT6	2.0	18.0	0.10 ~ 0.70	無	
MT7	2.0	6.0	1.17	無	
MT8	2.0	5.0	0.99 ~ 1.22	無	
MT9	2.0	5.0	0.45 ~ 0.88	無	
MT10	2.0	8.0	2.16	無	
MT11	2.0	7.0	0.25 ~ 0.40	有	壁穴住居跡
MT12	2.0	4.0	0.70	無	
MT13	2.0	6.5	1.80	無	近世磁器出土

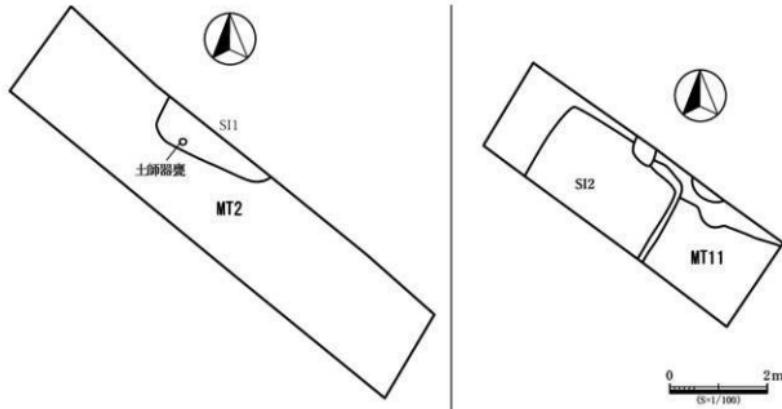


図 67 杉の下南遺跡 MT2,11 平面図

間に掘り込みらしき痕跡は確認されなかった。

杉の下南遺跡

杉の下南遺跡では、調査区を計 13箇所設定し、便宜的に MT1 ~ 13 の調査区名を付して確認調

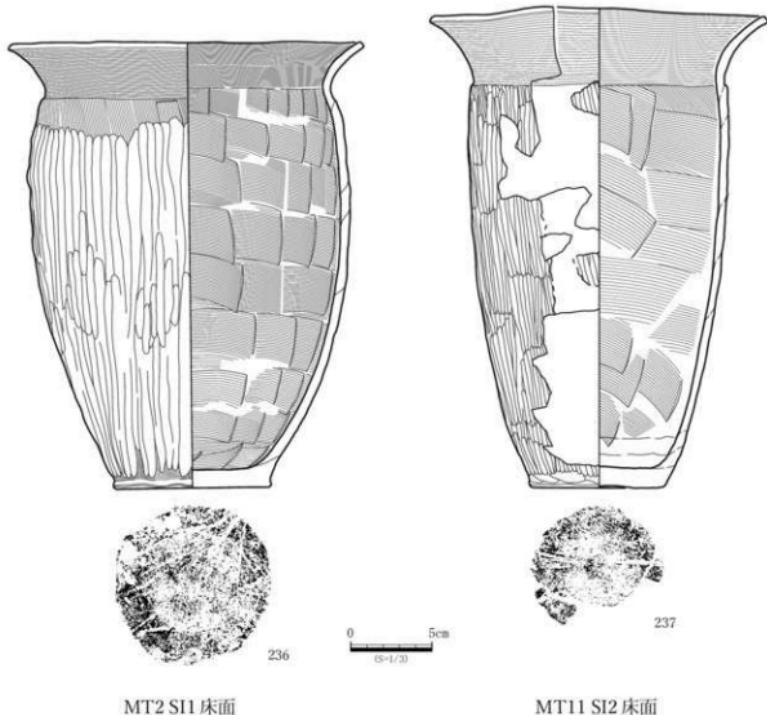


図68 杉の下南遺跡 T2 SI1,T11 SI2 床面出土遺物

査を実施した。

調査の結果、MT2,11で古代の竪穴建物跡が検出された。この竪穴建物跡からは、土師器の長胴甌が良好な状態で出土している。

【SI1】

MT2で検出された。東西2.6m×南北0.8m以上の方形を呈するものと思われ、さらに調査区外北東へ延びる。北を主軸とした方位はN-25°-Eを指す。覆土は暗褐色土の混交する黒褐色土である。

【SI2】

MT11で検出された。東西3.0m×南北1.8m以上の方形を呈するものと思われ、さらに調査区外南西へ延びる。北を主軸とした方位はN-32°-Eを指す。覆土は黄褐色土小ブロックを含む黒褐色土である。

表20 杉の下貝塚・波路上西遺跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡出土土器觀察表①

標印No	出土位置	種別	器種	法量(cm)			特徴
				口径	底径	高さ	
44-2	ST4	圓文土器	深鉢	—	—	(5.0)	圓文(LR), 大木 10
44-3	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(7.2)	波状縁(山形状)、頭目文(), 滅縫文。門崩
44-4	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.1)	圓文(RLR), 門崩
44-5	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(6.6)	網目状燃文(), 門崩
44-6	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.9)	圓文(LR), 門崩
44-7	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.4)	圓文(LR), 門崩
44-8	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(2.8)	圓文(LR), 門崩
44-9	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.1)	楕状把手。大木 10(新)
44-10	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.3)	圓文(LR), 圓状把手()、波継刺文。大木 10(新)
44-11	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.1)	圓文(LR), 山形状突起、波継刺文。大木 10(新)
44-12	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.4)	山形突起、弧状沈縫文、波継刺文。大木 10(新)
44-13	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(2.6)	波状縁。指円形燃文(), 圓文(LR), 大木 10(新)
44-14	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.5)	波状縁。降縫文、沈縫文。大木 10(新)
44-15	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.8)	方形区画文、圓文(RL), 大木 10
44-16	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.5)	燃文系(), 大木 10
44-17	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.2)	楕状波継文。大木 10(古)
44-18	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.2)	圓文(LR), 圓状沈縫文。大木 10(古)
44-19	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.8)	沈縫文。大木 10(古)
44-20	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.9)	口部波状燃文(), 鋸歯状燃文系(), 織維含入、内面擦痕(ナヂ), 門崩
45-21	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.0)	波消燃文(LR), 弧状壓垂文。門崩
45-22	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.3)	斜行燃文燃系文(), 弧状壓垂文。門崩
45-23	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(2.4)	焼位、織位沈縫文、縱走燃文(RL), 門崩
45-24	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.3)	弧状燃文。織位波消燃文(R), 門崩
45-25	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.8)	69と同じ体。門崩
45-26	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(2.7)	弧状沈縫文、条縫文。門崩
45-27	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.8)	72と同じ体。門崩
45-28	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.1)	72と同じ体。門崩
45-29	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.4)	72と同じ体。門崩
45-30	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.2)	72と同じ体。門崩
45-31	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(7.5)	72と同じ体。門崩
45-32	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(12.6)	陰縫文(円筒区画文、沈縫文、圓文(LR), 大木 10(新))
45-33	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(2.8)	方形区画文、圓文(RL), 大木 10(新)
45-34	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.1)	陰縫文(方形区画文、沈縫文、圓文(LR), 大木 10(新))
45-35	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.2)	衝円形燃文、圓文(LR), 大木 10(新)
45-36	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.8)	衝縫文、圓文(RLR), 大木 10(新)
45-37	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.0)	陰縫文、圓文(RL), 大木 10(新)
45-38	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.6)	陰縫文、圓文(RL), 大木 10(新)
45-39	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.4)	燃文系(R), 大木 10(古)
45-40	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.5)	圓文(LR)波多条。大木 10(古)
45-41	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(5.4)	圓文(RLR), 大木 10(古)
45-42	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.7)	圓文(LRL), 大木 10(古)
45-43	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.7)	圓文(RLR), 弧状沈縫文。大木 10(古)
45-44	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.7)	圓文(RL), 波継刺文。弧状沈縫文。袖座
45-45	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.3)	織位波状沈縫文、燃系文(L), 袖座
45-46	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.8)	弧状燃文
45-47	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.4)	波状沈縫文、圓文(LR)
45-48	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.6)	側部燃走燃系文(L), 織維含入、内面擦痕(ナヂ), 門崩
45-49	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.8)	側部波消燃走燃系文(L), 織維含入、内面擦痕(ナヂ), 門崩
45-50	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(4.0)	非結束波状縫文(LRL), 内面ナヂ(), 前期
45-51	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(3.4)	非結束波状縫文(LRL), 内面ナヂ(), 前期
45-52	ST5	圓文土器	深鉢	—	5.4	(2.1)	無文。内面ナヂ。外底面木壓痕
45-53	ST5	圓文土器	深鉢	—	—	(2.8)	外向炳口目→ナヂ。内面炳毛目。外底面木壓痕
45-54	ST6 SX1	束縫型	壺	—	—	(2.6)	内面炳毛目
47-55	ST6 SX1	束縫型	壺	—	—	(5.6)	106上同じ体
47-56	ST6 SX1	束縫型	壺	—	—	(5.3)	側部側面(), 波継縫文(LR), 陰縫文。門崩
47-57	ST6 SX1	束縫型	壺	—	—	(13.2)	横S字形文、圓文(LR)
47-58	ST6 SX1	束縫型	壺	—	—	(4.1)	106上同じ体
47-59	ST6	圓文土器	深鉢	—	—	(8.0)	圓文(LR)
47-60	ST6	圓文土器	深鉢	—	(10.0)	(3.7)	底面無文
49-61	S7	圓文土器	深鉢	—	—	(6.0)	波状縫、陰縫文。木 10(新)
49-62	S7	圓文土器	深鉢	—	—	(5.5)	平縫。弧状陰縫文、圓文(LR)
49-63	S7	圓文土器	深鉢	—	—	(4.9)	波状縫、降縫文、圓文(LR)
49-64	S7	圓文土器	深鉢	—	—	(3.9)	平縫。弧状陰縫文、圓文(LR), 大木 10(新)
49-65	S7	圓文土器	鉢	—	—	(5.8)	平縫。弧状陰縫文
49-66	S7	圓文土器	深鉢	—	—	(3.6)	圓文(LR)
49-67	S7	圓文土器	深鉢	—	—	(4.7)	弧状沈縫文、圓文(LR), 大木 10(古)
49-68	S7	圓文土器	深鉢	—	—	(4.9)	陰縫文、沈縫文、圓文(LRL), 大木 10
49-69	S7	圓文土器	深鉢	—	—	(4.2)	陰縫文、圓文(LR), 大木 10
49-70	S7	圓文土器	深鉢	—	6.2	(1.2)	外底面無文
51-73	S78	圓文土器	深鉢	—	—	(5.8)	沈縫文、圓文(LR), 大木 10

表21 杉の下貝塚・波路上西遺跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡出土土器観察表②

博認No	出土位置	種別	器種	法縦(cm)			特徴
				口径	底径	高さ	
55-74	ST9	圓文土器	深鉢	—	—	(6.8) 圓文(LR), 門前	
55-75	ST10	圓文土器	深鉢	—	—	(2.9) 122と同一個体。大木10cm新	
55-76	ST10	圓文土器	深鉢	—	—	(2.2) 弧底圓文、圓文(LR), 大木10cm新	
55-77	ST10	圓文土器	深鉢	—	—	(4.8) 弧底圓文、圓文(RL,R), 大木10cm新	
55-78	ST12	圓文土器	深鉢	—	—	(4.1) 圓文(RL), 門前	
55-79	ST12	圓文土器	深鉢	—	—	(5.9) 平縁、弧底圓文、燃系文(R), 宮戸I b	
55-80	ST12	圓文土器	深鉢	—	—	(5.5) 圓文(RL), 燃系圓文、沈文(LR), 門前	
55-81	ST12	圓文土器	深鉢	—	—	(3.8) 横縁・無縁状沈縫文、點付文、圓文(LR), 門前	
55-82	ST12	圓文土器	深鉢	—	—	(3.5) 圓文(L), 大木10cm新	
55-83	ST12	圓文土器	深鉢	—	—	(3.4) 圓文(RL,R), 大木10cm古	
55-84	ST13	圓文土器	深鉢	—	—	(5.6) 横縁沈縫文	
55-85	ST13	圓文土器	深鉢	—	—	(4.3) 横縁沈縫文、圓文(LR)	
55-86	ST13	土師器	甕	—	—	(6.3) 外面ケズリミガタ、内面へラナデ	
55-87	ST13	土師器	甕	—	—	(2.6) 外面面本葉模、内・外面ケズメーナデ	
56-88	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(11.7) 鹿形文(R), 門前	
56-89	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(6.7) 波状縁、沈文、首孔、門前	
56-90	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(5.9) 波状縁、燃系文(R), 門前	
56-91	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.9) 波状縁、門前	
56-92	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(5.1) 平縁、無縫合突文、燃系文(L), 門前	
56-93	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(2.8) 平縁、圓文(LR), 門前	
56-94	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.6) 波状縁、陰文、門前	
56-95	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.8) 平縁、圓文(LR), 門前	
56-96	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.4) 波状縁、大木10	
56-97	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.5) 波状縁、波状刺突文、陰縫文、沈縫文、圓文(LR), 大木10	
56-98	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(7.5) 植付把手、首孔、陰縫文・刺突文、宮戸I b	
56-99	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.0) 植付平行丸突文、弧状凹縫文、宮戸I b	
56-100	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.5) 横縁平行丸突文、宮戸I b	
56-101	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.3) 平縁+小突起、人頭帶突文(LR), 宮戸I b	
56-102	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(5.9) 燃系渦巻文、圓文(LR), 門前	
56-103	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.8) 燃系渦巻文、圓文(LR), 門前	
56-104	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.0) 方形区画文、圓文(LR), 門前	
56-105	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(6.0) 圓文(LR)段多条、門前	
56-106	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.2) 沈縫文、圓文(LR), 大木10	
56-107	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(6.0) 沈縫文、圓文(LR), 大木10	
56-108	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.2) 弧底沈縫文、圓文、宮戸I b	
56-109	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.2) 圓文(LR), 宮戸I b	
56-110	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.1) 鹿形文(R), 宮戸I b	
56-111	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(5.8) 多豪沈縫文、圓文(LR), 後期初頭・飼面	
56-112	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.5) 多豪沈縫文、圓文(LR), 後期初頭・飼面	
56-113	ST21 包合層	圓文土器	深鉢	—	8.4	(3.2) 外面面本葉模ナデ。外面無文	
56-114	ST21 包合層 最下層	圓文土器	深鉢	—	—	(6.1) 波状縁、圓文(LR), 大木10cm門前	
56-115	ST21 包合層 最下層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.1) 燃系文(R), 大木10cm門前	
56-116	ST21 包合層 最下層	圓文土器	深鉢	—	—	(4.5) 161と同一個体。大木10cm門前	
56-117	ST21 包合層 最下層	圓文土器	深鉢	—	—	(3.1) 植目状燃系文(R), 大木10cm門前	
59-124	ST22 SX4	土師器	甕	—	—	(2.4) 外面ナデ、内面底屈カルシウム付着	
59-125	ST22 SX4	土師器	甕	—	—	(2.1) 内・外曲ナデ	
59-126	ST22 SX5	土師器	甕	—	—	(7.6) ロクロ成形、外曲ナデ	
59-127	ST22 SX5	土師器	甕	—	—	(5.1) ロクロ成形	
59-128	ST22 SX5	土師器	甕	—	—	(5.4) ロクロ成形	
59-129	ST22 SX5	土師器	甕	—	—	(1.8) ロクロ成形	
59-130	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(8.3) 外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-131	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(2.3) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-132	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(2.3) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内曲ヘラ底	
59-133	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(7.8) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-134	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(6.7) 外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-135	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(2.7) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ。内面ヘラナデヘラナデ	
59-136	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(7.3) 外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-137	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(6.2) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-138	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(3.0) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-139	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(1.7) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-140	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(5.3) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内面ヘラナデヘラナデ	
59-141	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(4.2) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内面ヘラナデ・澗落	
59-142	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(3.2) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ。内面ヘラナデ	
59-143	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(2.3) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ。内面ヘラナデ	
59-144	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(3.2) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ、内面ヘラナデ	
59-145	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(3.1) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ。内面ヘラナデ	
59-146	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(4.0) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ。内面ヘラナデ	
59-147	ST22 SX5	土師器	製毛土器	—	—	(3.4) 口縁部ヘラ切り、外曲ナデ。内面ヘラナデ	

表22 杉の下貝塚・波路上西遺跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡出土土器観察表(3)

件名	出土位置	種別	断面	法量(cm)			特徴
				口径	底径	壁高	
59-148	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.8)	口部削へたり、外曲ナデ、内曲ヘラナデ
59-149	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.7)	口部削へたり、外曲ナデ、内曲底端カルシウム付着、ハジケ剥落
59-150	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.8)	口部削へたり、外曲ナデ、内曲ヘラナデ
59-151	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.3)	口部削へたり、外曲ナデ・底端カルシウム付着、内曲ハケメ
59-152	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.1)	口部削へたり、外曲ナデ、内曲ハケメナデ
60-153	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(6.4)	口部削へたり、外曲ナデ・底端カルシウム付着、内曲ナデ
60-154	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.8)	口部削へたり、外曲ナデ、内曲ヘラナデ
60-155	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.4)	口部削へたり、外曲ナデ、内曲ハケメナデ
60-156	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.8)	外曲ナデ、内曲ハケメヘラナデ
60-157	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(6.4)	外曲ナデ、内曲ヘラナデ
60-158	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.9)	外曲ナデ、内曲ハケメヘラナデ
60-159	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(10.8)	外曲ナデ、内曲ハケメナデ
60-160	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(5.3)	196 同一個体
60-161	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.5)	外曲ナデ、内曲剥落
60-162	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.5)	外曲ナデ、内曲剥落
60-163	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.3)	外曲ナデ、内曲ハケメ
60-164	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.7)	外曲ナデ、内曲ハケメ
60-165	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(6.5)	外曲ナデ、内曲ハケメヘラナデ
60-166	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(5.1)	外曲ナデ、内曲ハケメナデ
60-167	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(5.2)	外曲ナデ、内曲ハケメ
60-168	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.9)	外曲ナデ、内曲ハナナデ、ナデツケ
60-169	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.2)	外曲、内曲ナデ
60-170	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.9)	外曲ナデ、内曲ハナナデ
60-171	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.2)	外曲ナデ、内曲ハナナデ
60-172	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.1)	外曲ナデ、内曲ナデツケ
60-173	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(5.1)	外曲ナデ、内曲ハケメツク
60-174	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(5.4)	外曲ナデ、内曲ハケメツク
60-175	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.2)	外曲ナデ、内曲ハナナデ
60-176	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(6.6)	小型、外曲ナデ・底端カルシウム付着、内曲ナデツケ、ナデ
60-177	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(2.1)	外底面・外曲ナデ、内曲剥落
60-178	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(2.4)	外底面削り状圧痕、外曲ナデ、内曲底端カルシウム付着
60-179	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(2.2)	外底面・外曲、内曲ナデ
60-180	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(3.2)	外底面・外曲、内曲ナデ
60-181	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(5.1)	外底面削り状圧痕、内曲剥落
61-182	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(4.1)	外底面・外曲、内曲ナデ
61-183	ST22 SX5	土器	製埴土器	—	—	(2.7)	内底面・外曲、内曲ナデ
63-186	HT9	圓文土器	深鉢	—	—	(6.1)	縦走鰐文(RL)、内曲ナデ
63-187	HT10 SX1	圓文土器	深鉢	—	—	(9.2)	平縁、縦走短沈縁文、帶状削束引状圓文(LR,RL)、纖維含入、内曲ナデ、早期末
63-188	HT10 SX1	圓文土器	深鉢	—	—	(7.2)	189 上同一個体、早期末
63-189	HT10 SX1	圓文土器	深鉢	—	—	(5.4)	帶状圓文(RL)、内曲ナデ。早期末
63-190	HT13 SK1	圓文土器	深鉢	—	—	(2.1)	縦走燃系文(L), 繊維
63-191	HT13	土師器	甕	—	—	(1.9)	クロ
63-192	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(2.7)	圓文(RL)・斜位刻目文、纖維。内曲ナデ
63-193	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(2.4)	圓文(RL)、内曲ナデ
63-194	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(3.4)	圓文(RL)、内曲ナデ(柔痕)
63-195	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(3.7)	縦走圓文(RL)、内曲ナデ、纖維
63-196	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(5.0)	圓文(RL)、内曲ナデ
63-197	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(4.0)	斜行鰐文(RL)、内曲渦紋、纖維
63-198	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(4.4)	縦走圓文(RL)、内曲ナデ
63-199	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(5.3)	斜行鰐文(RL)、縦走圓文、内曲ナデ(柔痕)
63-200	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(3.6)	斜行鰐文(RL)、縦走圓文(RL)、内曲ナデ
63-201	HT20	圓文土器	深鉢	—	—	(2.2)	燃系文(L)、内曲ナデ
63-202	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(4.3)	平縁、口部削り状目文、内・外曲とも圓文(LR)、早期末
63-203	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(2.3)	側下部削走燃系文(RL)、纖維、内曲ナデ底端カルシウム付着
63-204	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(3.3)	側走燃系束引状圓文(L,RL,RD段多条)、纖維、内曲ナデ
63-205	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(3.8)	圓文(RL)、纖維、内曲ナデ
63-206	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(3.1)	側下部圓文(LR)、内曲ナデ底端カルシウム付着
63-207	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(6.1)	圓文(RL)、纖維、内曲ナデ
63-208	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(5.3)	帶状斜行圓文(LRD段多条)、内曲ナデ。早期末
63-209	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(8.2)	菱形狀斜走燃系束引状圓文(L,RL,RD段多条)、内曲ナデ。早期末
63-210	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(3.3)	圓文(LRD段多条)、内曲ナデ。早期末
63-211	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(3.7)	圓文(RL)、内曲ナデ。早期末
63-212	HT21	圓文土器	深鉢	—	—	(4.1)	圓文(RLD段多条)、内曲ナデ。早期末
65-213	HT25 SK2	圓文土器	深鉢	—	—	(3.7)	圓文(RLD段多条)、纖維、内曲ナデ
65-214	HT25 SK2	圓文土器	深鉢	—	—	(3.3)	縦走圓文(RL)、纖維、内曲ナデ
65-215	HT25 SK2	圓文土器	深鉢	—	—	(4.2)	燃系文(RL)、内曲ナデ、纖維
65-216	HT25 SK2	圓文土器	深鉢	—	—	(3.8)	燃系文(RL)、内曲底端カルシウム付着、纖維
65-217	HT25	圓文土器	深鉢	—	—	(4.8)	内・外曲ナデ
65-218	HT25	圓文土器	深鉢	—	—	(1.9)	波状縁、沈縫文。大洞A
65-219	HT25	圓文土器	深鉢	—	—	(7.6)	菱形狀斜走燃系束引状圓文(L,RL,RD段多条)、纖維。内曲ナデ(細かい柔痕)

表23 杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡出土土器観察表④

神岡No	出土位置	種別	器種	法線(cm)			特徴
				口径	底径	高さ	
65-220	HT25	縄文土器	深鉢	—	—	(3.6)	縄文(RL), 内面ナデ(条痕)
65-221	HT25	縄文土器	深鉢	—	—	(3.2)	縄文(RL), 内面ナデ(擦痕)
65-222	HT25	縄文土器	深鉢	—	—	(3.4)	縄文(RL), 内面条痕
65-223	HT25	縄文土器	深鉢	—	—	(3.2)	Z2上同一個体
65-224	HT25	縄文土器	深鉢	—	—	(6.5)	縄文(RL), 織縞, 内面ナデ(上部細かい条痕)
65-225	HT25	土器	製造土器	—	—	(3.3)	粘土供給目
65-226	HT29	縄文土器	深鉢	—	—	(2.8)	縄文(RL), 内面ナデ
65-227	HT30	縄文土器	深鉢	—	—	(5.3)	上部ナデ, 下部縄文(RL), 内面ナデ(条痕)
65-228	HT30	縄文土器	深鉢	—	—	(3.7)	縄文(LR), 内面ナデ
65-229	HT30	縄文土器	深鉢	—	—	(4.5)	縄文(RL), 内面ナデ(条痕)
66-230	HT40	縄文土器	深鉢	—	—	(6.0)	差筋束状縄文(LR, RL), 織縞, 内面ナデ(条痕)
66-231	HT40	縄文土器	深鉢	—	—	(4.1)	縄文(RL), 織縞, 内面ナデ
66-232	HT40	縄文土器	深鉢	—	—	(3.5)	縄文(RL), 織縞, 内面ナデ
66-233	HT40	縄文土器	深鉢	—	—	(3.5)	縄文(RL), 織縞, 内面ナデ
66-234	HT40	縄文土器	深鉢	—	—	(2.2)	縄文(RD)段多条, 織縞, 内面ナデ
66-235	HT40	縄文土器	深鉢	—	—	(2.2)	縄文(RD)段多条, 織縞, 内面ナデ
68-236	MT2 S11床面	土師器	長財度	22.8	10.0	27.5	口縁部内・外面横ナメ, 体部外面ハケメ→ハケズリ→ミダキ, 内面ナデ→ナデ→ナナダ, 底面木製痕残る, SC後半か。
68-237	MT11 S12床面	土師器	長財度	(20.8)	8.8	29.7	口縁部内・外面横ナメ, 体部外面ハケメ→ハケズリ→ミダキ, 内面ナデ, 底面無文。

表24 杉の下貝塚・波路上西館跡・杉の下南遺跡・波路上西遺跡出土石器観察表

神岡No	出土位置	種別	石材	遺存度	法線(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
44-1	ST1表土	礫石	安山岩	完形	8.0	5.9	5.1	下部に打痕, 倒面に磨面有り, 表面一部剥離。
49-71	ST7	微細剥離剥片	碧岩	完形	2.9	1.6	0.7	
49-72	ST7	微細剥離剥片	碧岩	完形	3.5	2.4	1.0	
57-118	ST21包含層	磨製 錐状石製品	砂岩	両端および 裏面欠	(8.4)	5.8	[4.3]	全体的に平滑, 表面一部剥離, 石棒か。
57-119	ST21包含層	磨石	砂岩	端部一部欠	12.2	[6.7]	5.2	表面に一方所凹み有り。
57-120	ST21包含層	磨石	砂岩	端部一部欠	13.9	6.4	4.3	全体的に摩減, 表面に一部磨面有り。
57-121	ST21包含層	磨石	安山岩	完形	13.1	8.5	5.9	表・裏面に広く磨面有り。
57-122	ST21包含層	磨石	安山岩	完形	7.5	5.7	2.2	下縁から左測縁に方部有り。
57-123	ST21包含層	微細剥離剥片	安質凝灰岩	完形	2.8	1.6	1.1	
61-184	ST22SX5	磨石	砂岩	完形	12.8	6.7	6.0	全体的に摩減, 磨面認められない, 自然石か。
61-185	ST22SX5	磨石	砂岩	完形	8.9	7.8	5.5	表面に磨面有り。

3.まとめ

今回は確認調査ということもあり、性格の不明な遺構も多かったが、縄文早期～奈良・平安時代に至る遺構群を発見することができた。調査地は微高地に位置するが、遺構の分布は全体的に見て、頂部から東・南側の緩斜面にかけての範囲で確認されている。特に、MT2,11では奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出されており、遺物の分布から、縄文時代には頂部付近を中心と展開されていたと考えられる生活空間が、時代の進展とともに低地へと拡張している様子が垣間見られた。ただし、今回の調査では弥生時代～古墳時代の遺物は出土していないことから、縄文時代から平安時代までの間、当地での生活が継続的なものであったのか、断続的なものであったのか、判断するには未だ尚早であろう。今後、さらに調査成果を積み上げていく機会があることに期待したい。



杉の下貝塚 現況（南から）



杉の下貝塚 ST4 混貝層検出状況（南から）



杉の下貝塚 ST5 混貝層堆積状況（南から）



杉の下貝塚 ST12 混貝層検出状況（北から）



杉の下貝塚 ST13 混貝層検出状況（北から）



杉の下貝塚 ST6 全景（西から）



杉の下貝塚 ST7 全景（西から）



杉の下貝塚 ST8 全景（西から）



杉の下貝塚 ST9 全景（西から）



杉の下貝塚 ST10 全景（西から）



杉の下貝塚 ST21 全景（南東から）



杉の下貝塚 ST22 全景（西から）



杉の下貝塚 ST22 SX6 完掘（南から）



杉の下貝塚 ST22 SX7 検出状況（南から）



波路上西遺跡 HT3 全景（南から）



波路上西館跡 HT10 全景（南から）



波路上西館跡 HT10 SX1 検出状況（南から）



波路上西遺跡 HT11 全景（北から）



波路上西館跡 HT23 全景（南から）



波路上西館跡 HT23 カマド（南から）



波路上西館跡 HT26 全景（西から）



杉の下南遺跡 MT2 全景（北西から）

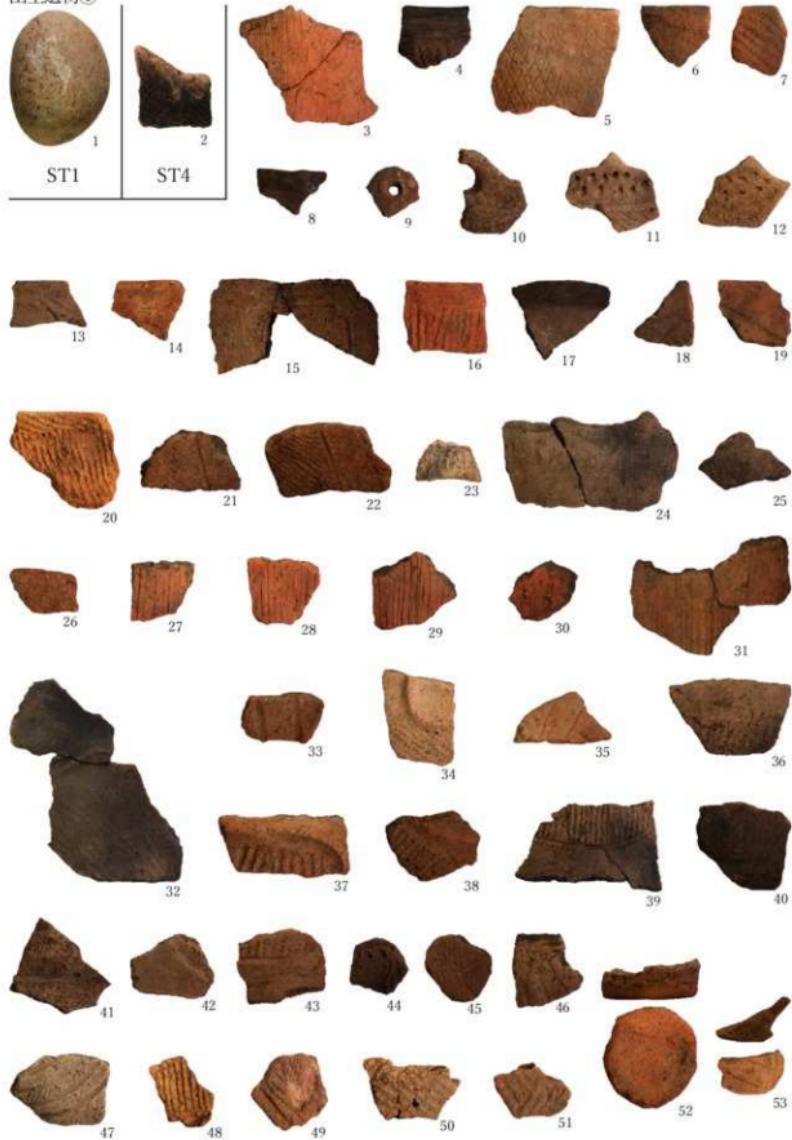


杉の下南遺跡 MT2 SI1 検出状況（南西から）

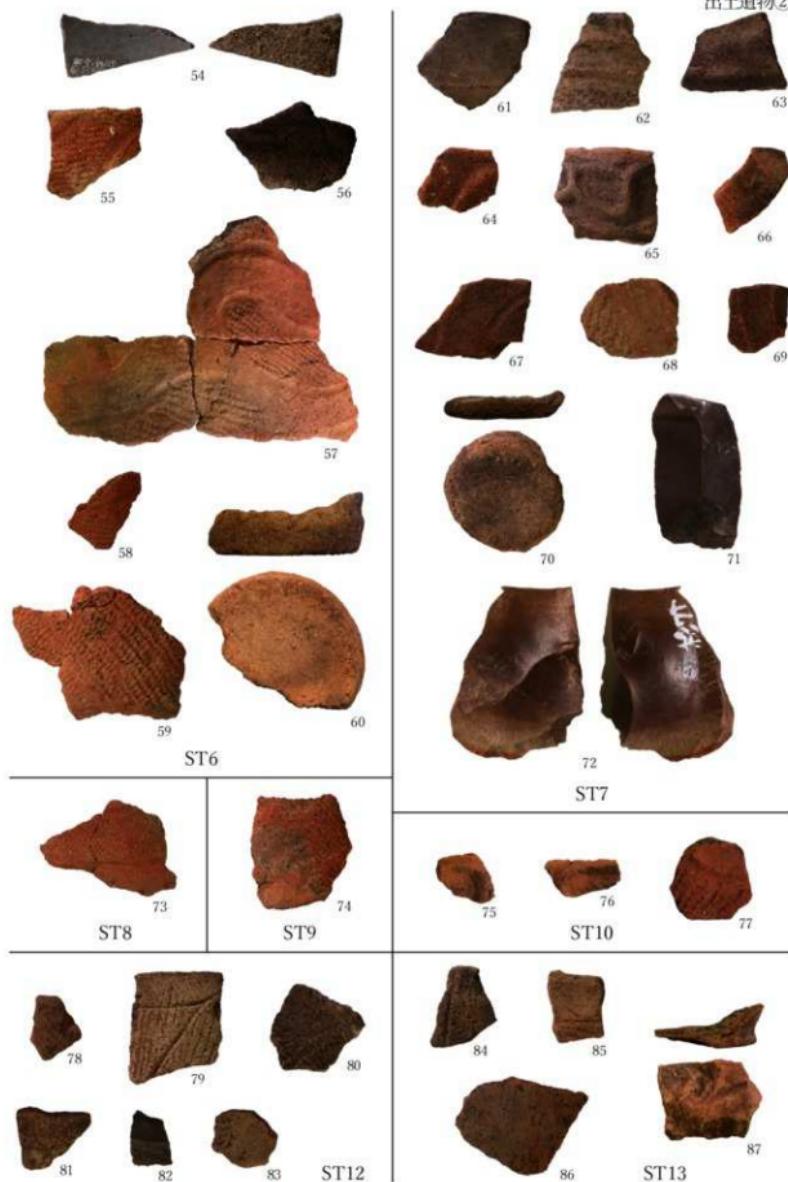


杉の下南遺跡 MT11 SI2 検出状況（北西から）

出土遺物①



出土遺物②



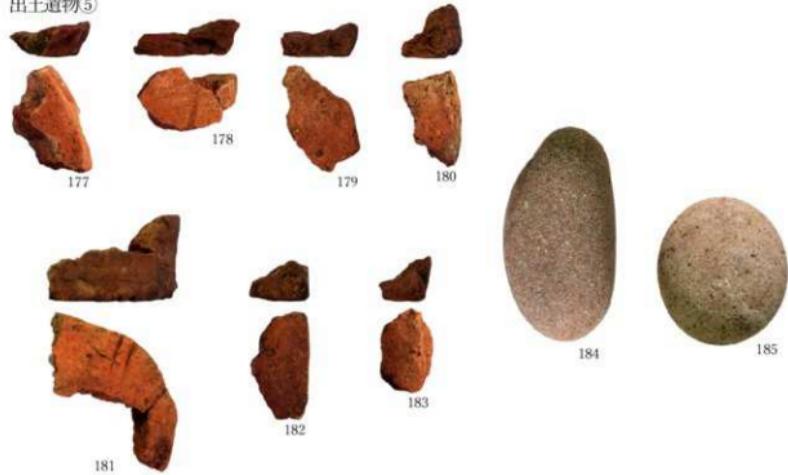
出土遺物③



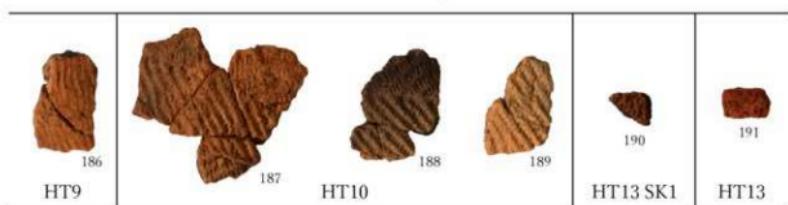
ST21



出土遺物⑤



ST22 SX7 ⑤







236



MT2 SI1



237



MT11 SI2

杉の下貝塚における放射性炭素年代

(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

杉の下貝塚は、宮城県気仙沼市波路上杉の下内に所在する。測定対象試料は、ST22SX6 から出土した木炭 1 点である（表 1）。

2 化学処理工程

- (1) メス・ビンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : AcidAlkaliAcid) 処理により不純物を科学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時に「AAA」1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0 yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。pMC が小さい (¹⁴C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (¹⁴C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

(4) 暗年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暗年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暗年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暗年年代較正年代を表す。暗年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暗年較正年代の計算に、IntCal3 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暗年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暗年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の ^{14}C 年代は 1090 ± 20 yrBP、暗年較正年代 (1σ) は 901 ~ 991 cal AD の間に2つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						LibbyAge (yrBP)	pMC (%)
IAAA-143113	I	ST22SX6 理2層	木炭	AAA	-30.11 ± 0.31	1,090 ± 20	87.36 ± 0.23 [#7153]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、暗年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暗年較正用 (yrBP)	1 σ 暗年年代範囲	2 σ 暗年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-143113	1,170 ± 20	86.44 ± 0.22	1,085 ± 20	901calAD-921calAD (23.7%) 961calAD-991calAD (44.5%)	895calAD-929calAD (29.6%) 940calAD-1014calAD (65.8%) [参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal3 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

<本書の引用・参考文献一覧>

- ・紫桃正隆『仙台領内古城・館 第2巻』 1973 宝文堂出版販売
- ・相原淳一・柳澤和明『宮城県文化財調査報告書第214集 山居遺跡（縄文時代編）ほか 一三陸
縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書IX-』 2007 宮城県教育委員会
- ・森幸一郎・平木場秀男・西村力・古田和誠『気仙沼市文化財調査報告書第10集 気仙沼市震災復
興関連遺跡発掘調査報告書1 平成24年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調
査事業に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査』 2017 気仙沼市教育委員会
- ・戸沢充則『縄文時代研究事典』 1994 株式会社東京堂出版
- ・福田友之『七ヶ浜町文化財調査報告書第1集 史跡「大本廻貝塚」環境整備調査報告書I』 1973
七ヶ浜町教育委員会
- ・藤沼邦彦「宮城県」『日本城郭大系 第3巻 山形・宮城・福島』 1981 新人物往来社

報告書抄録

ふりがな	けせんぬまししんさいふっこうかんれいせきはくつちょうきはうこくしょ							
書名	気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書2							
調書名	平成24～26年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業に伴う公共事業関連遺跡発掘調査							
シリーズ名	気仙沼市文化財調査報告書							
シリーズ番号	14							
編著者名	熊谷 満							
編集機関	気仙沼市教育委員会							
所在地	〒988-8502 気仙沼市魚市場前1番1号 TEL 0226-22-3442							
発行年月日	西暦 2019年3月15日							
ふりがな 所取遺跡名	しょざいちら 所在地	コード	世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
つかだてあと 塚 館 跡	けせんぬまし 氣仙沼市 最知南最知	04205	59042	38°50' 54.71"	141°34' 27.42"	2012.08.07 / 2012.08.10	204.00 m ²	最知川原地区 防災集団移転 促進事業
あみだいじょうあと 南最知城跡	けせんぬまし 氣仙沼市 長職原ノ沢	04205	59043	38°50' 20.55"	141°34' 35.41"	2012.08.20 / 2012.08.23	205.00 m ²	杉の下地区 防災集団移 転促進事業
ほりあいだてあと 雁 合 館 跡	けせんぬまし 氣仙沼市 波路上内田	04205	59038	38°50' 8.27"	141°35' 19.00"	2013.12.09 / 2013.12.18	504.00 m ²	波路上内田地 区防災集団移 転促進事業
のしたいせき 野々下遺跡	けせんぬまし 氣仙沼市 野々下	04205	62042	38°49' 24.18"	141°34' 19.01"	2014.01.27 / 2014.02.05	441.00 m ²	大谷地区防災集 団移転促進事業 (野々下田端)
た や だてあと 田 屋 館 跡	けせんぬまし 氣仙沼市 本吉町 津谷松岡	04205	62024	38°47' 25.37"	141°30' 31.27"	2014.04.21 / 2014.04.31	230.00 m ²	津谷地区災 害公営住宅 整備事業
かくとうひとせき 海鼠北遺跡	けせんぬまし 氣仙沼市 最知南最知	04205	59023	38°51' 6.59"	141°34' 26.43"	2014.05.19 / 2014.05.22	363.00 m ²	農山漁村地域 復興基盤総合 整備事業 (最知工区)
みどりだいせき 綠 館 遺 跡	けせんぬまし 氣仙沼市 最知南最知	04205	59024	38°51' 8.05"	141°34' 33.85"			
ひしはしましまだてあと 東八幡館跡	けせんぬまし 氣仙沼市 東中才	04205	59081	38°55' 29.92"	141°35' 5.13"	2014.06.25 / 2014.06.25	63.00 m ²	防災集団移転 促進事業 (鹿折北地区)
				38°55' 20.09"	141°35' 10.27"	2014.11.18	54.00 m ²	
ひしはしましまだてあと 猿喰東館跡	けせんぬまし 氣仙沼市 最知北最知	04205	59045	38°51' 9.55"	141°34' 45.30"	2014.11.25 / 2015.01.16	108.59 m ²	最知川原第二 地区防災集団 移転促進事業
ほしやいせき 星 谷 遺 跡	けせんぬまし 氣仙沼市 岩月星谷	04205	59104	38°51' 27.91"	141°34' 31.28"	2015.02.18 / 2015.02.25	278.00 m ²	

気仙沼市文化財調査報告書第14集

気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書2

平成24～26年度東日本大震災復興交付金

埋蔵文化財発掘調査事業に伴う公共事業関連遺跡発掘調査

発行日 2019年3月15日

編集・発行 気仙沼市教育委員会

〒988-8502 宮城県気仙沼市魚市場前1番1号

印 刷 小宮山印刷工業株式会社

〒988-0392 宮城県気仙沼市本吉町猪の鼻169-7



この印刷物は、環境にやさしい
「植物油のオイルインク」で